

第1章

山形大学教員研修会 「第6回 教養教育ワークショップ」

山形大学教員研修会 第6回

教養教育ワークショップ



＝ 高等教育に関心のある市民・学生の皆さんの
多数の参加をお待ちしています＝

日時：平成16年8月6日（金） 10時から16時30分まで
会場：山形大学教養教育2号館（山形市小白川町）

第1部 講演会「日本における初年次教育の 可能性と課題」

講師 関西国際大学教授 演名 篤 氏

第2部 ラウンドテーブル

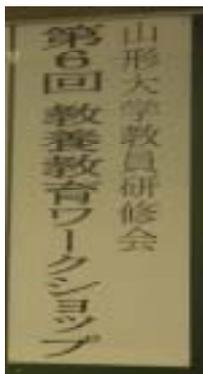
No	テーマ	コーディネーター
ラウンドテーブル1	e-learningについて	櫻井敏久教授（学務部教養センター長）
ラウンドテーブル2	アートの学習能力開発促進について	立松 隆教授（人文学部）
ラウンドテーブル3	YUPEE-デザインデザインについて	須賀一好教授（教育学部）
ラウンドテーブル4	英語教育の改革について	石田忠雄教授（教育学部）

第3部 全体会「山形大学における新たな取り組みについて」

主催：山形大学教育方法等改善委員会・高等教育研究全国センター
共催：地球ネットワークFID、旭水
お問合せ：山形大学学務部教務課教育企画係（023-628-4707）

第1章 山形大学教員研修会「第6回 教養教育ワークショップ」

山形大学教員研修会「第6回 教養教育ワークショップ」



日 時：平成16年8月6日（金） 10:00～16:30
 会 場：山形大学教養教育棟
 主 催：山形大学教育方法等改善委員会
 高等教育研究企画センター
 共 催：地域ネットワークFD“樹氷”

趣 旨

今年の山形大学主催のワークショップは、山形県内の3大学・3短期大学からなる「地域ネットワークFD“樹氷”」が共催することになった。このため県内の大学・短大からの参加者がこれまで以上に増加した。加えて、県外の大学からの参加者も増えている。また、8月2日から4日まで蔵王山寮で実施された「FD合宿セミナー」に、“樹氷”を始めとして県内2大学・2短大、県外6大学からの参加者があった。このように、山形大学のFD活動の理念である「相互研鑽」の輪が大学の中から飛び出して、県内へ、そして全国へと広がっている。これは、山形大学の使命の一つ「開かれた地域の教育拠点の形成」の具現化である。

本ワークショップは3部構成となっている。第1部の基調講演は、関西国際大学の濱名 篤教授にお願いした。先生は高名な高等教育の研究者で、学会等でご活躍の方である。現在、高等教育において「初年次教育」は重要なキーワードとなっている。先生から、アメリカの初年次教育の実態を踏まえて、これからの日本の初年次教育のあり方について示唆に富んだお話を頂くことになっている。山形大学の初年次教育のあり方を考える基盤としよう。

第2部は、ラウンドテーブルという名の分科会となっている。机を円く組んで、お互いの顔を見ながら山形大学の現在進行形あるいは直面している問題について忌憚のない議論をしようではないか。ここに提出された問題、「eラーニング」、「プレゼンテーション能力」、「学生支援体制」、「英語教育改革」はいずれも我々が早急に打開・発展していかなければならないものばかりである。

第3部は、ラウンドテーブルで話し合われたことを全

員で共有し明日に繋げるためのものである。限られた時間であるが、実りを共有したい。

山形大学は分散キャンパスである。それゆえキャンパスを越えて教員が交流する機会はほとんどない。このワークショップは、「FD合宿セミナー」とならんで数少ない交流の場である。我々は「教育」という共通の課題で熱く議論しよう。明日の山形大学と県内の大学・短大、そして日本の高等教育の発展のために。

日 程

- 10:00 開会 鬼武副学長
 （教育方法等改善委員会委員長）
 学長あいさつ
 日程説明（教育方法等改善委員会委員）
- 10:15 【第1部】基調講演
 演 題：「日本における初年次教育の可能性と課題」
 講 師：関西国際大学教授
 濱 名 篤 氏
 質疑応答
- 12:00 昼食・休憩
- 13:00 【第2部】ラウンドテーブル
 ラウンドテーブル1：e-learningについて
 コーディネーター：櫻井 敬久教授（学情調査センター）
 ラウンドテーブル2：口頭コミュニケーション能力の育成と能動的学習について
 コーディネーター：立松 潔教授（人文学部）
 ラウンドテーブル3：YU 360°-テイングシステムについて
 コーディネーター：須賀 一好教授（教育学部）
 ラウンドテーブル4：英語教育の改革について
 コーディネーター：丸田 忠雄教授（医学系研究科）
 講 師：岩部 浩三教授（山口大学）
- 15:10 【第3部】全体会
 「山形大学における新たな取り組みについて」
 （各ラウンドテーブルの報告）
- 16:30 閉会

第1部 基調講演 「日本における初年次教育の可能性と課題」

講師：関西国際大学教授

濱 名 篤 氏

司会（小田） 皆さんおはようございます。

これから第6回教養教育ワークショップを開きたいと思っております。

今年の表紙を見ていただければお分かりかと思っております

けれども、共催として山形県の大学・短大のネットワークをしておりますネットワークFDの“樹氷”が共催となっております。多数のご参加どうもありがとうございます。

昨日から花笠まつりが始まりまして、山形大学も学長以下たくさんの方々に参加されて、熱を帯びた、なかなか活気のある踊りを市民の皆さんにもご提供できたと思います。

今日も、ぜひとも活発なご議論をしていただければと思っております。

まずは開会につきまして主催者側から、教育方法等改善委員会の委員長であり、高等教育企画センターのセンター長でもある鬼武副学長の方からご挨拶をお願いいたします。

鬼武 おはようございます。

本当に暑い夏で、また夏休みということにもなりますけれども、本当にこれだけの方がワークショップにご参加いただきまして本当にありがとうございます。



第6回ということ、本当にもう6年目になったのだなというふうに、感慨ひとしおであります。

今日は、もう既にプログラムにございますように、お一人は今その前にいらっしゃる濱名先生と、それから午後からは山口大学の英語の教育改革に取り組んでいらっしゃる岩部先生に来ていただいておりますけれど、ちょうどこの濱名先生を講師にお願いし、それから岩部先生も英語教育の講師にお願いしているその中で、2つの大学共にですね、GPに採択されたという話です。関西国際大学は大学のユニバーサル化における学習支援、それから山口大学の方はTOEICを活用した英語教育ということでですね、2つともGPに採択されたということで、また非常にタイミングが良かったなというふうに思います。

我々はやっぱり継続は力なりで、ワークショップを開くたびに新しいものが、ふえるというふうにいつも感じていることでもあります。

ともかく、今日一日長いですが、ぜひ最後まで一緒に参加していただいて、私どものまた新しい力に、エネルギーになるようにさせていただきたいと思っておりますので、何卒よろしく願いいたします。時間のこともございますので、講師の紹介はよろしいですね。ということで、本日一日よろしく願います。また、講師の濱名先生、それから岩部先生は午後によろしく願います。ということで私の挨拶にかえさせていただきます。

きます。ありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。

引き続きまして、昨日の花笠まつりで山形大学の先頭に立ちまして、おそらく一番上手い踊りとは言いがたいですけれども、昨日の全部の踊りの中で一番元気で明るかった仙道学長の方からご挨拶いただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

仙道 おはようございます。

鬼武先生もおっしゃっていましたが、この暑い、もう夏休みを取られるような時に、こんなにたくさんの方々がこのワークショップにご参集いただいて本当に感激でございます。

鬼武先生もおっしゃっていましたがもう6年ですか、長い期間に渡ってこの活動に力を入れてきたという山形大学の誇りだと思います。

私自身も教養教育というのは、非常に大事だということを常日頃申し上げております。私自身はですね、いわゆる人間教育としての教養教育というのが大事だということをおっしゃっていただいておりますが、ただよく考えてみますと、教養教育というのは高校から大学という一つの違った教育システムに移るといふところがあるので、いろんなおそろく意味があるのだろうということを最近考えておまして、そういう意味で今日の濱名先生のその、初年次教育というものをどういった切り口からお話いただけるのか、大変興味のあるところでございます。

また、午後からのワークショップで、語学教育の問題ということで、講師として山口大学の岩部先生にもお話をさせていただくということで、この語学というのも非常にその時代時代によって変わってくるわけですので、私たちがそういう教わった頃は、英文学の勝っている頃でございますけれども、そういった時代と共に変わる物の一つとして語学教育があるのだろうと思います。

やはり、私たちもそういった色々な切り口から見た教養教育という全体的に捉えていかなければならないのかなというふうに思います。そういった意味で、今日のこのワークショップは大変意義のあるものだと思います。



私も午前中だけでも、参加させていただきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。大変多くの方々にご参加いただいて、改めて感謝申し上げます。ご挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。

続きまして今日の日程を説明いたしたいと思います。

これより引き続きまして午前の部はですね、第1部としまして基調講演、濱名先生の基調講演を行いたいと思います。それから、12時から昼食休憩を取りまして、午後の部は13時から始まります。ラウンドテーブル、分科会として4つを設定しております。みなさんご興味のあるところ、また予約されたところに行っていただければと思います。

会議場はですね、このパンフレットにカラーで載っております。1号館です。教養教育1号館で、この北側にある棟ですのでよろしくお願ひします。会場の、例えば111番教室とありますのは、1号館の1階だということです。ですから126番教室、ラウンドテーブル1という126教室につきましては、1号館の2階にあります。並びや建物の配置はこれをご覧ください。

それを1時から始め15時までやりまして、10分休憩を取り15時半からは全体会を行います。全体会は127番教室となっておりますので、ここではありませんので、1号館の中の2階にありますのでそちらの方にお集まりください。それが5時半に終わる予定に、全体を閉会する予定になっております。どうぞご協力の程よろしくお願ひいたします。

それではプロジェクターなど会場を設営しますので少々お待ちください。

第1部基調講演を始めたいと思います。

今日お招きしました講師の濱名篤先生をご紹介したいと思います。関西国際大学の教授であられる濱名先生は、ここの講師紹介文を読まれたらお分かりだと思いますけれども、現在、関西国際大学の副学長でもあり、高等教育研究所の所長でもあり、さらにですね、今日の講題にあります初年次教育の、初年次教育研究開発センター長でもあられます。

また、学会等につきましては数々のご要職に就かれておまして、GP、国の色々な政策のGP、グッドプラクティスの色々な審査員にもなられている方でございます。

特に今日お話をいただく初年次教育は、センター長であるだけではなく大学教育学会のそのテーマの中心人物となってこの数年研究なさっている方です。

お手元に渡っている資料をご覧になればお分かりかと思いますが、非常に具体的なお話を今日は聞けるということで楽しみにしているところでございます。簡単のところですけども、私からの紹介をこれで終わらせていただいて早速お話を伺いたいと思います。

濱名先生よろしくお願ひいたします。

濱名 ご紹介いただきました濱名でございます。

今日はお暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。ご期待に添える話になるかどうかいささか疑問ではございますけれども、ちょっと暑いので上、ちょ

っと失礼させていただきます。

ほっとしているところでございまして、山形に、空港に着きましたら、これは京都より大変だと思ったのですが、皆様方の服装を見てほっといたしておりますので、私も上着を脱がさせていただきます。



この初年次教育というふうな標題でございますけれども、もともとは、そこにございまして、国際的にはFirst Year Experienceと言われておまして、正確には、初年次の体験プログラムだというふうに考えていただいた方が良いでしょうけれども、日本にこれこの言葉が入ってまいります段階で紆余曲折がございまして、結果的に現在、初年次教育というのが一番その内容を示す上で、一般的に用いらる用語に最も近いということだと思います。

ほかにどういう言葉を使っていたかと申しますと、一つは導入教育という言い方を、これは今でも残っております。それと1年次教育という言葉もございまして、で初年次教育。この3つがほぼ併用されておりました。

私も大学教育学会で、小田先生にもご参加いただいておりますけれども、大学教育学会の方で、この4月から初年次教育・導入教育という、ナカグロでまだ2つづら下がっていますが、そのその研究委員会というのを学会として初めてつくりました。学会としてしばらく、これから3年かけて検討して行こうということになりました。

その過程の中で、あるいは先生方がですね、ご覧になられたのを見ますと、先ほどございましたグッドプラクティス、「特色ある教育支援プログラム」が、昨年始めました時にですね、第2分科会の教育課程教育内容に関する例示としてですね、初年次教育というのがあがりました。

私は絹川先生、絹川正吉先生にやられたと思ったんですが、私はそれまで1年次教育という訳し方をむしろ使っていたのですけれども、絹川先生はとも初年次の方がお好きだったようで、あの委員会の委員長は絹川正吉先生ですので、絹川先生がその名前を公的なところで使われてしまいますと、First Yearの訳し方を1年次という訳し方ではなくて、初年次と訳さざるを得ないという形になりました。

で、一方その導入教育というのはちょっと違う観点から発達してきたもので、専門教育の導入、展開、発展とかですね。こういうその考え方でやられてきたところでございまして、どの分野かと言いますと、例えば医学とか工学はですね、こうした物の考え方で専門教育を組み

立っているのです、それは我々がもう当の昔にやっている導入教育にほかならないと、こんなことはたいしたことではないというのが、最初の反応ではなかったかと思えます。

ところが、これ全世界に目を広げて見ますとですね、この First Year Experience というのは現在 20 カ国くらいです。

一番流行っているのはアメリカです。アメリカ以外にもどんな国が熱心かと言いますと、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、最近非常に流行ってきているのがスコットランド、大体その北中米からオセアニア、アジアで言いますとですね、韓国も今年学会に来てましたですね。韓国、香港、シンガポール、このあたりがやっています。で、中国は全然今のところまだ動きがありません。

ヨーロッパで言いますと、スウェーデンでございますとかイギリスでございますとか、全ての国ではございません。まだ一部でございますが、来年 18 回目の世界大会を開くのですが、これはスコットランドが手を挙げております。スコットランドでやることになりました。したがって、そのアメリカだけのプログラムではないと。

私の親しい友人になってきていますが、そのランディ・スイングを大学教育学会が一度呼びました、初年次教育の全世界でもベストファイブに入る影響力を持っている人ですが、彼が最近行ったのも U A E だそうです。アラブ首長国連邦ですね。

イラクにアメリカが侵攻している真っ只中に行っていて、気が付いたらアメリカ大使館が U A E からいなくなっていたのにも関わらず、彼はまだ U A E にいたと。で、ある日突然、彼が気が付いたら大使館がなかったと。どうしようと言うので、U A E の大学関係者によって国外に出たというような話をしておりましたが、そういうようなところで始めております。

もともとはいつ頃からかと言いますと、レジュメの 1 ページにもございますように、アメリカのサウスキャロライナ大学が起源だと言われております。そこで University101 が開講されたと。

これは先生方よくご承知のことだと思いますが、University101 ということは 1 年生の時の最初に取り科目の科目コードでございますので、一番最初の科目としてそれが開講されたものがスタートであります。

その中心人物が、82 年に全米大会を主催いたしましたジョン・ガードナーでございます、これは全米的なムーブメントになって行く一つの始まりであったわけでございます。

86 年には国際大会が開かれるようになりまして、89 年からは Journal of the Freshman Year Experience という雑誌も刊行されております。で、約 20 カ国で採り入れられているということでございます。

こういうプログラムを私どもがなぜ関心を持ったかと言いますと、私どもの大学は、1998 年にできたこのセミナーとほぼ歴史を一にするくらいの歴史しかない新設で

ございまして、その前身は短大でございます。短大としてもたいした歴史がございませんで、87 年に短大を作ったぐらいで、後発新設大学の悲哀というものを常々、今もずっと抱えております。

私自身は教育社会学、高等教育論というものを専門にしておりましたが、私が学会の中でそれなりに評価をしていただいたり仕事が回ってくるのはなぜかと言いますと、高等教育研究者や教育社会学者というのは大体、もう少しプレステージの高い、セレクトティブな大学にある教育研究の講座の教員等々が主でございます、私のようなタイプは比較的数が少ない。

ところが、高等教育が現在直面している問題の最たるものは、ユニバーサル化という問題でございますね。

要するに進学率がご案内の通り、トロウも言いました。進学率 15 % までのエリート段階、先生方の中にまだエリート段階で大学教育をお受けになられた方がおられるかと思いますが、進学率 15 % 未満の特権として高等教育を教授された段階から、紛争世代と言われる進学率 15 % を越えたマス段階の高等教育、大衆にとっても権利として高等教育を受けることが許されるようになった段階の教育。で、50 %、進学率 50 % を越えたものを、エリート、マスについてユニバーサル化と。

現在、ご案内の通り大学・短大と高専の 4、5 年生への進学率では日本は 50 % 越えておりません。47 % くらいですかね。でございますが、ところがですね、専門学校の数値をたしますともう 60 % 越えているわけでございます。

ちなみにこの前、つい最近、日経新聞や朝日が書きましたですね。全入が 2 年早まって多分 2007 年になると。あの日経の記事を書きました編集委員の横山晋一郎氏が書いている段からいきますと、要するに大学も短大も進学率が下がっていて、専門学校だけ上がっているわけですね。

かつては、大学に入れないから専門学校に行くというイメージが我々高等教育研究者の中でもあったのですが、今は必ずしもそうではない。専門学校の方が人気がある部分にかかるわけですので、そうしますと日本は実質的にもうユニバーサル化に直面している。

そういう直面を指摘しますと、従来と比べると明らかに異質なタイプの学生が入ってきます。異質なタイプというのは一つのタイプではなくて、多様なタイプの学生が入ってくるということでございます。

多様な学生が入ってくると、従来のような大学教育は成り立たなくなってくる。おそらく山形大学でもですね、ドンと席に座って自分の専門の話をととうとする講義が成立する先生、教員の方というのはほとんどいらっしやらないのではないかと思うのですね。かなり色々なことをやらないと関心を示さない。

一時期、我々教育社会学で私語の研究が流行ったのですが、最近私語の研究はないですね。なぜなら、私語しない。学生は代わりにメール打っていますから。

ですから、先生方もお気付きかと思いますが、ふと気

が付くと何で静かなのだろうと。一生懸命メールを打っているだけで、そのメールはほかの人には直接的には被害を及ぼしませんので。で、そういうふうになってしまってきましたと、でもじゃあ授業を聞いているかというと聞いていないという状態になってくるわけでございます。

そうした多様な学生、色々な、今まで相手にしたことがないような学生が入ってきた時に、じゃあどうするのかということ、我々日本の高等教育関係者も考えなければいけない。

私どもの大学が98年に出来ました時に、最初につくりました研究所の一つが高等教育研究所でございました。で、その時に私どもが後発大学としてやりましたのが、GPA、厳格な成績評価。それと先ほどGPのご案内がありましたが、グッドプラクティスでいただきました学習支援センター。このあたりが大体最初に始めたことでございます。

厳格な成績評価をやるためには学習支援が必要だし、これから高等教育がどうなるか自分たちで調べておかないとえらい事になるぞ、というこの3つが新設大学にとっての知恵だったわけでございます。

そのテーマをやって行きます時に、最初に私ども、厳格な成績評価を入れる時には、学生をいたずらにですね、無条件に成績が上がらなかつたら大学勧告で辞めてもらうと。いっぱい出したんです、かつては。ところがですね、それだけではですね、異議申し立てが来るだろうということで、それを導入する時に学内から色々ございました、準備段階から。

その時に、じゃあ学習支援を始めようと。やっぱり多様な学生に対する支援をしなければいけないということで学習支援センターというのを始めたわけでございます。

最初はあるわけですね、そのセンターに、相談窓口。ところがですね、なかなか待っているだけでは学生は来ないので、いろいろ手を替え品を替えやってきた歩みが評価を認められたわけでございますけれども、ところがですね、その学習支援センターというのはですね、最終的にはですね、全員が来るわけではありません。首に縄つけて、学習支援センターに行ってお前支援を受けると。聞かないわけですね。それでどうしなきゃいけないかといった時に、私どもも最初はアメリカの学習支援システムを色々調べましたが、それで気が付いたのは、どうもこのFirst Year Experienceってこれ面白い。

ということで、学習支援センターも調べました。リメディアルも調べました。補習教育も調べました。補習教育、アメリカではもう今は低下。もうこんな感じです。何でか。お金がなくなると、補習教育みたいに色々な段階でこけた人間に対して細やかに支援をしているとですね、氾濫した川の堤を、堤防をどんどん埋めているだけのような話ですので、根治療法としてはこれで全ての問題は解決しない。

どうもアメリカを見ていった時に、この初年次教育というかFirst Year Experience 私はFYE, FYEと言っていますが、FYEに辿り着いたわけですね。

アメリカというのは、私は基本的にはアメリカ人というのは極めて合理的な思考をする人達だと思っています。アメリカは多様な、ユニバーサル化に対する対応をしました。ラーニングサポート、学習支援もやりました。リメディアルもやりました。だけど、今はその2つよりもどう見てもFirst Year Experienceの方が流行っている。

何故かということ、多様な学生に対して最初のうちは細やかな対応を考えるのですね。それは、ひとえにアメリカの大学における中退率の高さというのが背景にあるからです。

アメリカの大学の中退率というと、1年目から2年目あたりでぼろぼろこぼれていきます。ちょっとデータを出しましょうか。これ、1年生から2年生のドロップアウト率です。これはACPが調べました99年のデータなのですが、見ていただきますと、Highly Selective、もっとも選抜度の高い大学で、これ1年生から2年生のドロップアウト率が8.4%です。Selective 大学で18.3%。Traditional、伝統的な大学で27.1%。Liberal Artsで35.2%。Open Admission、難易度が下がるとですね、45%。1年から2年生でいなくなるわけですね。

ところが、これよりすごい国があるわけですね。イタリアは中退率67%ですから3分の1しか卒業しません。

こういうことが背景にあるということをご承知いただければと思うのですが、それを考えていった時に、アメリカの大学、これは実は国立大学もそんなに違った問題じゃないのですね。

最近神戸大学にいる私の友人にうちの大学のFDで来てもらって話をしてもらったのですが、神戸大学はもう学務金収入が3分の1だと。給与の3分の1は学務金から収まっていると。これが入らなくなると神戸大学は深刻な問題になるという神戸大学の話でした。

山形大学もおそらくどのくらいでございましょうか、学長先生。同じくらいですかね。3分の1ということ、学生がですね、3分の1の学生が、3分の1途中で辞めたとしましょうか。ということはですね、先生方の給料の9分の1カットになるわけですね、実際は。運営交付金より実はもっと切実なのかも分かりませんが、そのドロップアウトは。

ところが、これがあまりまだ日本ではあまり大きな問題だと認識されていないようでございますけれども、とりあえずアメリカはそういう問題が背景にございました。

それでアメリカの場合も、最初こういうプログラムが発達する前の、前段階はどんなことだったかと言いますと、やはりですね、80年代あたりにやっぱりアメリカも18歳人口の減少とかを迎えますけれども、その前にまずアメリカの大学生も勉強しなくなった。それは日本と同じだったわけですね。

そこで、何をやったかということ"人生とキャリア"みたいにですね、職業につながる教育プログラムを70年代にやると。70年代はこれがうけていましたが、70年代の終わりになって、要するに80年代の頭になってアメリカの景気がガーンと落ち始めて、Japan as No 1だなんだと

いうふうになってきた状態のときにはですね、これが効かなくなったわけです。

最近の日本の大学生と全く状況一緒です。景気が良くて、将来自分のキャリアがバラ色に見える時には、そういう仕掛けは効くのですね。ところが景気が悪くて、将来バラ色の夢が描けない時に、キャリアをえさに学生を引っ張ろうとしてもこれは乗ってこないわけです。

それで出てきたのが、実はFirst Year Experience というタイプのプログラムだったということです。で、このプログラムが広がった最大の理由は、経済的理由、お金です。

F Y Eをやるとリテンションが下がらない。リテンションと言いますのは、学業継続率、前の学期からどれだけ学生が残ってくれるかということで、リテンションはアメリカの大学にとって極めて重要な指標ですけれども、リテンションが下がらないのに効果があるからF Y Eを導入すると。

誰が一番熱心に導入するか。学長が導入されると。そういう話でありまして、それはですね、それはそうです。

これは、F Y Eというのは、先生方が通常考えていらっしゃる授業とはかなり違います。そういう授業の部分と、アクティビティとか体験の部分がありますので、アメリカでは日本という事務系の方、つまりファカルティメンバー以外の人たちもこのF Y Eの担当者になっています。40%くらいそういうスタッフが入っています。

ただし、彼らはそういうトレーニングを受けていますし、俗な言い方をしますとファカルティとスタッフというのがいて、その真ん中にアドミニストラータティーチャーがいると、彼らの中での説明、私に分かるような説明ではそういうふうに言っています。アドミニストラータであってティーチャーであって、教えるのはこういう初年次のためのプログラムなんかに職員の方が参画される。

私は日本に導入する時に、別に職員の方にこの教育をやっていただくために調べているわけではないので、それは逆にやり方によってはそんな形も取れるというふうにご理解いただければと思います。



それで、前置きが長くなりましたが、じゃあどういうプログラムなのかということです。レジユメに戻りたいと思います。F Y Eを一言で言えば、「主に大学新生を対象にした、高校からの円滑な移行を計り、学習及び人格的な成長の実現にむけて、大学での学習を成功させるべく、総合的に作られた教育プログラムである」、という

ことでございます。

その中にはですね、大学生活への適応、これが大きいわけです。例えば、今、山形大学は新入生のオリエンテーション何日間くらいやっていますか？ お話はどういう方がどれくらい、ガイダンスというのをなさいますでしょうか？ 事務の職員の方が、教員の方が大体何時間くらいおやりになりますか？ 90分くらいですか。はい。

あの、まだ良い方なんです。ひどい大学は、みんな渡して、「これ読んでおいて」と言って何もしない大学も国立大学であるようでございます。私立大学はですね、最近そういうことをいっぱい強化してきました。

フレッシュマンウィークとか1週間くらいかけるのですね。かけるのですが、私どもの大学も実はやりましたですけれども、1週間くらい、4、5日かけていました。健康診断とか色々なことをやって。

それでガイダンスを各部署に喋らせるとですね、調べてみると何と4日間で7時間、話を聞かされているのですね。それが、大体の日本の私立大学でそうなのです。

使われる資料はというと、大体の国立で聞くと便覧に全部書いてあるからこれを読めと言われるのですね。ところがですね、先生方、あれを自分が大学を卒業していなかったとして、大学に入ったばかりであれが読めると思われますか。最近私ども、この4月から全面的に変えたのですが、分からないですね、あれ。

例えば、単位とか履修登録という言葉が分かるでしょうか、高校生に。いくら山形大学の学生が地域での優秀な学生が来ているとしても、分かるはずがないです。講義と演習の違いは書いてある。でも、書いてある用語がまず分からない。ということなのでですね。

大学に来たのだから、いやしくも大学に来たんだから、自分の力でやれるようにならなければいけない、と言いたくなるのが教員の性癖でございます。

ところがですね、今日持ってきたのが、これをちょっと見ていただきましょう。これ、アメリカのアパラチアンステートユニバーシティという大学の、これですね。こういうバインダー式のファイルですが、これがフレッシュマンウィークのための、一般教育のガイドなのですね。

見ていきますと、まず、最初のページに出てくるのが、先生方のオフィスの電話番号。あとは、どういうふうにして学生生活の計画を立てるの？ というのがここですね。How to use your academic plan? というような話になっておりますけれども、ここですね、このくらいの言葉しかありません。

実は見ていきますと、これは英語のプレースメントテストの説明のページですけれども、あるいは、どこを見ていただくか分かるかな、これが自分のアドバイザー情報なのですね。アドバイザーの名前、アドバイザーのロケーション、自分の先生のオフィスはどこにあるか、電話番号を書かせる。それとE-mailアドレスを書かせるかですね、オフィスアワーはいつだと。で、いつ電話す

ると一番連絡が取りやすいかと。こういう情報を自分で書かせるようになっていきます。最初はもちろん印刷はしていません。

これを見ていきますと、まず活字の量が全然違います。要するに、入学してきた段階で大学の基本用語であるとか大学の常識を振りかざして、高校生に分からせようというところが、我々が本当にそれでいいのかと考えなきゃいけない。

実は、アメリカではこれかなりベースの研究です。要するに、なぜドロップアウトするか、なぜリテンションされないのかという問題と、親が大学を知らない親に聞いたって分からないのですね。聞けば分かるだろうと、誰に聞きに行くのですかといった時に、誰に相談していいかという情報はほとんど流されないというのは、ほとんどの大学の常識です。

ところが、このF Y Eで最初にやりますのは大学生活への適応です。まずそこからなのですね。ちなみにアパラチアンステートユニバーシティというのは、ノースキャロライナのステートユニバーシティです。難易度で言うそうですね、さっきの3つ目から2つ目の間くらいですね。

ところが、このF Y Eのプログラムでは非常に評価が高く、全米トップ10の常連です。で、山の上でですね、この辺の感覚でいきますと蔵王の山の上に大学があるような感じです。そういうその大学の町じゃないというか、そういうところなのですけども、そういうのを見ますとですね、大学生活への適応というのが入っています。

アパラチアンステートユニバーシティなんていうところでいいますと、一番最初に教員と学生の関係作りのために、それこそ外へ、アクティビティに何時間か時間をとって行かせて、そこであのトラストフォードってご存知でしょうか？ 集団を信じて後ろ向きに倒れるとか、何というか木の壁があってみんなで助け合って登っていかなくちゃいけない。教員も入れて、そういうその集団作りをしていったりするのですね。それを大学への適応、こういうことが非常に重視されているわけです。

もちろん、この中には大学のミッションであるとか、大学のキャンパスルールというのが出てきます。これはやっちゃいけないというようなことも、もちろん含まれています。

更に大学で必要な学習技術の習得。これは、比較的地

本の大学も最近注目していますので、レポートが書けない、学力低下、こういうことから言われている、読む、書く、批判的な思考力、調査能力。

で、タイムマネジメント。これは、時間があればまた詳しく申し上げますけれども、自分の行動、プライオリティを考えさせて、自分で自己管理できるようにというスキルだということですね。

日本ですとトラウマになっているスケジューリングというのがありまして、学校の世界でスケジューリングというのはですね、おそらく先生方ご自分のクラスで学生にお聞きになられたら分かると思うのですけど、昨日おととい、私、京都の高校生のプログラムでちょっと教えてそれで聞いたのですが、大体ですね、手帳を持っている学生は5人に1人もいないはずですね。山形大学では、おそらく携帯電話のスケジュール管理を入れたとしても、4分の1未満だと思います。

要するに彼らはスケジュール管理なんかしません。手帳も持っていません。おそらく社会人になって、営業手帳を持たされて、地獄を見るというスケジュールになっておりまして、彼らのその状態からしますとですね、もうスケジュールなんか立ててもどうせ駄目だと。

これ小学校教育のゆがみです。小学校の夏休みのスケジュール。8月30日に天気予報を調べるというあのサービスが必要であるような、トラウマなのですね。で、勉強を先にしてから遊びに行きなさい。アメリカではこれも間違い。アメリカでは、タイムマネジメントでそんなこと言いません。あなたのピークタイムに、あなたにとってプライオリティの高いことをやりなさい。最初から遊ぶ時間も余裕に入れておきなさいということをやりますけれども、そういうそのスキルを教えるというのもアメリカの中に入っています。

3番目。当該大学への適応。大学に対する適応というまた別の問題です。大学生活全般と、この山形大学に対する適応という問題であります。これはですね、親しみやすいと思うか、なんと思うかということです。

私どもの大学は、そのアメリカの真似をしまして、最近、今年始めましたのが、キャンパスカフェです。

これですね、私どもの大学は立地が悪いのですけども、入学式のあとは、去年までは体育館の中で立食のパーティーをやっていたのですが、どうもいまち盛り上がりません。ということで、アメリカのイーロンというですね、これはサウスキャロライナの大学でやっているのを真似まして、これ入学式のあと、みんな1年生ですね。一応、教職員、学生、保護者、どなたでも結構ですから、来ていただいたらお茶とコーヒーは用意していますのでどなたでもどうぞって。

スタッフサイドは全部首から名札をぶら下げて、我々も、それ以来、今日は持ってきておりませんが、私も名札をぶら下げて学内を歩いております。身分証明兼、相手から見たらどの先生かって名前が分からないからってということで、こういう形でやっているのですね。ただでどうぞって。こんなのどうなのかって思っていましたけど、

結構いましたですね。1時間以上、結構、もう流行っておりまして。

そのイーロンというのはですね、毎週水曜日にこういうことを学内でやっているという、いつでも。これは学内のコミュニケーションを良くするために、誰でも来て構わない。クッキーとコーヒーしかないけれども、それでも集まって雑談できる場だと。これは要するに、キャンパスに対する適応を促進するための方法論の一つでございます。

そういうことで、実はこの場所は今まであんな雰囲気では使われたことがなかったところなのですけれど、今年の1年生からは、たまたま、幸いなことに雨も降りませんでしたので、ここの場所のイメージがネガティブじゃなくなるわけですね。今までここは照り返しがきつくて、みんな前の理事長が作ったのですけれど、噴水かなかね、シューとかいって。僕も全然使ったことなかったのですけれど、使ってみるとその印象が変わるという、そういう例ということですよ。

そして4番目、これは割と日本の大学にとって必要になってくると思いますが、学習目標・学習動機の獲得。特に中下位校で強調されます。先ほど見ていただきましたように、アメリカの大学も日本の大学も、入るのが難しい大学はなかなか辞めません。ついて行くのが大変なはずですが、入ったことによってかなり自分の満足が満たされる場合は、辞めません。ですから、私存じ上げませんが、山形大学なりここにご参加のそれ以外の先生が所属する大学の志望順位が極めて高ければ、それだけで多少持ちます。

だけど、それが下がってくれば、要するに自分が本当は別のところに行きたかったという気持ちを転化させなければいけない。で、学習目標・動機の問題であります。これは非常に大きいわけです。

アメリカの大学は日本よりなんでこんなことを先にやったかと言いますと、それはLiberal Artsですから、入った段階でメジャーもマイナーも決めていませんから、2年生の終わりまでにメジャーマイナーを決めなければいけないからということがあるのですが。最近、先ほど言いましたスコットランド、オーストラリア、ニュージーランド、これはイギリス型の大学システムですから日本と一緒にです。入るまでの段階で学部学科を決めて入ってくる。ところが、やるのですね、これ。

なぜかと言いますと、実は、その決定が正しかったかどうかという問題、これが大きいわけです。あるいは、外から見たものと中に入ったものと違うということもある。あるいは自分がイメージしていたものと比べると、中身が全く違ったというようなことがあるかも知りません。あるいは、入った上で、例えば今までであれば、教育学部に入れば無条件に教員になれたというふうに思ったものが、必ずしもそうじゃないと考えた時に、それでこうしたものを確認させていく、獲得させていくということが非常に重要になってまいります。

5番目はですね、これはアメリカ独特の問題で、特に

セレクトティブな大学ほどこれをやるのですが、専門領域への理解・専門分野の決定準備。

日本でこれに一番近いのは、京都大学のポケットゼミですね。研究者として自分の後継者を早めにつくりたいという研究者の本能に従うと、こうなります。自分の研究テーマがいかに面白いかということを書いて、それに反応してくる学生に、早くから専門に対する方向へと。これは、伝統的にエリート段階の高等教育の中に抱えてきた要素で、これを使う大学もございます。

6番目として、文化的素養のある教養人への招待。これはですね、高校生と大学生は違うのだという誇りを与える、プライドを与えるということを、重視する大学もあります。

例えば、私が行った大学の中でですね、クラシックコンサートに学生の希望者を募って連れて行く。これは大学持ち。要するに高校生まではクラシックなんか聞かないだろうと。大学生になったら、別にクラシックが、まあ別にそんな教養人かどうか知りませんが、とりあえずそういうハイブローなもの、高校生ではやらないことをやるということによって、君達はもう高校生ではないのだよというその気持ち、意識の切り替えをする。

これらの内容があるのですけれども、多様でございまして、初年次教育の一番汎用的な本というのは、そのサウスカロライナが出している教科書なのですけれども、これを全米の大学全てが使っているわけではありませんし、実際のところ、行く大学によってやっている内容が違います。方法も違います。

特に違うのは内容で、セレクトティブな大学はアカデミックな意味合いが高くなります。ノンセレクトティブな大学に行くと、モラルの問題であるとか、将来の学習動機とか目標づけであるとか、やらなきゃいけないことが増えてまいります。で、どちらかと言うと、セレクトティブじゃない大学の方が、どちらかと言いますと必修にする度合いが多いということで、実は1つのタイプしか初年次教育というのがないというわけじゃないということ、まず最初に申し上げたいと思います。

従いまして、この種のプログラムは、関西国際大学バージョンと、山形大学が仮にお始めになるとしたらバージョンが変わってきます。で、導入されている度合いによって、全学で共通のプログラムをやっているらっしゃる大学もあれば、学部単位で若干違う教育をされている場合もありますので、これは、ですからかなり工夫の余地がある。

ただし、非常にはっきりしていますのは、今まで基礎演習で、私はこれに近いことをやってきたという方の中にはおられるかも知りませんが、それとは違います。個人的な営みでやるというよりは、むしろ組織としてプログラムを提供して支援していくというところが、このプログラムの一番大きな特色の1つであります。

ちなみにアメリカの大学ではですね、最初の1年生の、最初のファーストゼミスターからセカンドゼミスターで一番学生が辞めます。辞める理由は何かという、高校

と大学が違ふと。勉強のスタイルが違ふ。に加えて、ほとんどそのレジデンシャル、つまり寮に住まなきゃいけないとなると。親元を離れたりするということもあって、環境が一番激変するので辞めやすいですね。

アメリカの大学はその初年次に、おそらく全体、4年間のエネルギーの、アンダーグラジエイトによつての、8分の1のエネルギーじゃなくて、おそらく3分の1くらいのエネルギーをそこでもう使っているような気がします。

じゃあ日本でひるがえって考えてみたら、使わなくていいかと言いますと、やはり同じなのですね。下宿している学生もいます。高校と履修の仕方から全部違っているわけですから、そこにもう少しエネルギーを使ってもいいのではないかというのが我々の分析であります。

では、どうすればいいのか。1年生にとって成功って書いてあります。教育というのはですね、そんなにすぐに結果が出るものじゃないよと。4年経って、なおかつ卒業しないと教育の効果は判らないよ、というご意見があることは存じ上げております。ところが、最近の大学教育をめぐる状況はですね、そこまで評価は待ってられません。すぐに評価を出せ、結果を出せというわけですね。

先ほどありましたグッドプラクティスでもですね、5年間くらいの実績データを示せていうわけですね。ところが、始まって2年目ですから、今から始めたって5年後にあのプログラム終わっちゃっているような状態でございますので、常に今まであるデータを使ってデータを作っておられるわけです。

ところが考えてみますと、1年生にとっての成功というのは、きちんと定義をして測定すれば、成功かどうかということが分かるわけです。

成功については、いくつか哲学的な側面も含めてジョン・ガードナーたちはこういうふうに定義しております。学問的・知的能力の発達。人間関係の確立と維持。1番目はこれですね。

2番目は人間関係、特に、のちほど申し上げますが、日本の大学生にとって非常に大きな課題は孤独であるということです。

3番目。個人としてのアイデンティティの確立。これはおそらく多くの大学生が、いま達成していない問題です。

4番目。キャリアとライフスタイルの決定。キャリアに対するプランは、目的養成学部は比較的クリアだと言われます。しかし、大部分の学部学科にとってみれば教員の側が思っているほど明確ではありません。ですから、良く起こるミスマッチってこういうことです。例えば、君たちは法学部に来たのだから法律家を目指しているのだから、と法学の先生が言ったとしたら、全くそんなことはないわけです。

やりたいことがあって自分の学部学科に来たわけじゃない学生がいっぱいいて、例えば先生方がこう言えば多分イエスと反応するという問いはこういうことですね。

君たちは自分探しのために大学に来たのですか、と言ったらほとんどの学生は、うんって言ってくれます。

それは教員の側が、一般的に自分たちが大学教育をうけていた時のものと比べますと、イメージがかなり違っていてしまっていると。ですから、自分のアイデンティティはそんなに明確ではないという前提に立たなければいけないですね。ライフスタイルやキャリアプランというものを考えていかないと、学部、日本の今のアンダーグラジエイトの、学部に入った段階で将来が決まってしまうのは医学部くらいのもんですから、かなりその方向性を考えていかなければいけません。

5番目。心身の健康と維持ということをごさいますと、これドラッグもあります。アルコールの問題もあります。そういうことに毒されないような形で、いかにその心身のバランスを考えていくかということで、カウンセリング等々含めてかなり多様なことに対して注意を払っております。

6番目。人生について統合された哲学の発達。自分のフィロソフィを持たせるということを重視すると。

この6つの目標に向かって前進していくということが、1年生にとっての成功なんじゃないかと。抽象的には、ある程度お分かりいただけるのではないかと思います。

こうしたものはなぜ高まったかと言いますと、ここに先ほどちょっと言いました継続、リテンションの問題がございます。これは経済的理由です。収入に直結すると。

アメリカの大学を紹介するガイドブックが多数出ているのですが、ほとんどリテンションレートが出てきます。そのリテンションレートが低い大学は、長続きしない大学だから魅力がないということです。

アメリカのこのFYEの担当者は、リテンションレートがあがると給料が上がります。だからもう必死でやります。リテンションがあがれば自分の評価が上がるということでやってまいります。

ところが、日本の場合昨今、FYEについて少し先ほどお話をしましたが、FYEへの関心はリテンションに対する意識から高まったわけではありません。むしろ学力低下に対する対策、学力低下のために何か良い方法はないかと。どうも補習教育上手くないか。どうしようかと思っていたら、そういう何か聞きなれないものが出てきたと。どうもバタ臭いけど何か新しそうということで、藁をもすがるといふ感じで、たぶん初年次教育に関心をお持ちになる方が増えたのだらうと思います。

学部長調査をやった同志社大学の山田礼子さんたちの調査結果で言いますと、私立大学294団体、私大協の加盟大学を対象にしますと、既に72.1%が導入していると回答しております。

こういう数字を聞くと、うちはやっていないと思われた先生方は、うちは遅れているのかなと一瞬思われたかも知れませんが、これは調査というのは単純にみてはいけません。実はこの72.1%は、たった1日のガイダンスまで含めて、私たちは初年次教育をやっていると答えた大学も含めてのことでございます。実際には、教育プ

プログラムとして組織だったものやっていたら、25%から40%までだと思います。

中身を見ますと、基礎ゼミ、32.8%。専門分野への導入が26%。だから専門基礎教育が入っているのですね。情報、学習技術、ガイダンス・オリエンテーションからリメディアルまでもということ。

ちなみに、話がややこしくなるので、大学教育学会と我々の研究委員会では、前回、リメディアル教育はFYEとは別物であると。これはアメリカに行ったら、それは別だと、それを一緒に入れるのはとんでもないコンヒュージョンだ、と言われましたので、これはもう排除するというようにしております。

こういうことで、どうも関心はあるけど中身もまだコンセンサスじゃない。関心はあるけど何をやっていいのかわからない、という状態であろうかと思えます。

ところが、我々が外国の教育のプログラムであるとか方法を導入してくる時には、直輸入するとコケル場合が多いです。なぜかという、日本の大学生の実態に合った形で設計し直すというプロセスを経なければ、それはやっぱりしくじってしまいます。

我々の研究グループでは、昨年の4月、6月、10月ですね、学生個人を特定する形で、入学してきた学生が4月から6月、6月から10月、どう変化していくかというデータを取りました。まだ個人を貫いた分析が十分できていないのですが、その調査結果に基づいて、日本の大学生、これは国立も1校入っていますけれども、一般的に日本の大学生がみんなこうだとは言いませんが、こういう大学もあるということで見ただけならばと思います。

そこに見ましたように、方法は書いてございます。男性66.4、女性33.3。自宅が67%、下宿が32.5%。親学歴は、両親とも大卒が27%。父親のみ大卒、短大まで含めまして19%。母親のみ大卒が11%。いわゆる第一世代、親が大学教育を知らないのが4割。ほぼ日本の母集団に近いのではないかと思います。さほどセレクトティブな大学は多く入っていません。というかほとんど入っていません。一般大学です。

まず入学後の悩みというのを、2枚見比べていただきますと、項目番号でやっております。4月の段階ではどんな悩みが一番多いか。高校の友達に会いたくなる学生が4分の3。2番目に多いのが、授業が難しい、58%。授業が退屈、56%。さびしい、50%。こういうものが多くて、一番少ないのは、忙しくて勉強できないとかというのは、ほとんどまだいません。10%くらいです。

6月になりますと、授業が退屈だが増えます。友達に会いたくなる。変わりません。授業が難しい。変わりません。更にさびしいという気持ちもほとんど、やや増えるくらいでほとんど一定でございます。

10月になりますとどうなるかというと、友達に会いたくなるは若干減りますが、まだ69%が友達に会いたくなります。授業が退屈だはちょっと収まりますが、それでも6割、2番目に多い。さびしいも51%。

プラスの面はですね、実は右側の次のページを見ますと、授業を聞いて新しい考えができるようになったが37.2から、6月にやっと46.8。これは4月から6月の変化で大きかったのですが、10月になりますと5割を超えます。

そこに書いてありますように、どういう変化があるのか、どういうことが悩みなのかと言った時に、これはアメリカのティントという人が調査しているのですが、ソーシャルインテグレーションの問題とアカデミックインテグレーションの問題というふうに、2種類に分類できる。

ソーシャルインテグレーションというのは、人間関係に関わる悩みということで、そこに書いていますさっきの、友達に会いたくなるとか、さびしいとかいうようなものです。

それに対してアカデミックインテグレーションという授業に対する適応ということで、例えばどんなものかと言いますと、授業が難しいと感じるかとかですね、あるいは授業が退屈でありますとか、あるいは授業を聞いて新しい考え方ができるようになるかどうかという問題、この3つなわけです。で、入学直後の問題、この2つの問題がやはり日本の場合でも大きな悩みとして出てまいっております。

こうして見ていきますとですね、何というのでしょうか、青年期であるということ、思春期であるということあるのかもわかりませんが、非常にその人間関係というのが、大学生にとって大きな移行期の問題として関わっているということが、ご理解いただけるのではないかと思います。

一方、その授業に関するのは、授業は確かに難しいのですけれども、授業より人間関係の方が深刻だということ、まず認識してくる必要があると思いますし、授業が退屈だというのはですね、増えていくということですね。特に4月から6月の段階で増えるのです。

実は大学の授業に対して適応し始めるかあるいは不適応になるかというのは、6月ぐらいから既に分化が始まるということです。つまり、授業を聞いて新しい考え方ができるようになるのが増えるのも6月です。一方で授業が退屈だと思えるのも6月です。もう2か月もすると分化が始まって行くということでもあります。

そういうことから考えますと、大学生活の最初の半年というのは、いかに大きな意義を持つかということをお分かりいただけるのではないかと思います。

10月になりますと、先ほど言いました授業が難しいが減ってきます。半数以下になります。授業を聞いて新しい考え方ができるが13.5ポイント上昇しますので、適応する学生は着実に増加していきまして、学習面の悩み、つまり、アカデミックインテグレーションというのは、日本の大学教育、駄目だ駄目だと言われてはいますが、そうではなくて、一応駄目な学生と適応する学生の分化が進んでいて、決してそのアカデミックな部分で、入った段階と比べて駄目になっているわけではないわけ

であります。

ところが、不適応な学生はどんどん厳しくなっていて、アルバイトが忙しくて勉強できなくなるのも、だいたいもう4月から6月の段階で分化が起こってしまうわけであります。

したがって、どういうことかこうして考えていきますと、まず人間関係についての悩みはかなり根深い。半年ぐらいでは解消していない。それと授業に対する移行というのは、まず反省しなければいけないのは、幸いなことに山形大学は入っておりませんが、授業に対する悩みは十分出来ていない。アカデミックな移行というのは、過半数の学生が困難を感じている。

しかし、その中で時間をかけると、アカデミックな移行について適応する学生も一定数生み出して、そちらが過半数になってくるので、その過半数をいかに率を上げていくかという問題が大学教育の最初の半年の大きな課題の2つ目になってくるわけであります。

こういうことを考えていきますと、移行期の悩み、最大の悩みは人間関係。で、授業の理解力というのはやり方しだいということになってくるのですけれども、じゃあ、そのどういう点が高校と大学で不連続なのかということを見ていきたいと思います。

これは、入学時、4月の時点でのデータと6月、10月の時点で、自分で自信を持っていることと聞いております。かなりの項目を聞いているのですが、今日は自分で自信を持っていることの、上位6項目と下位6項目をあげてみました。

4月の段階で新入生、大学新入生が、自信を持っているのは、人付き合いや対人関係。これが不思議です。これが一番人気がある。だけど一番不安なもの人間関係なのです。相対的に考えて、自分は友達と上手くやっていると。そういう感じがいたします。

2番目が努力すること。50%。過半数の大学新入生が自信を持っているのはこの2つだけです。ほとんど自信は持たないで大学にくるといふふうに、山形大学はちょっと高いかも分かりませんが、そう大差はないだろうと。そういう感じがいたします。

自己理解が46.2%。体力44.2%。自分はやればできるという自信。43.8%。大学の講義の理解力。36.4%。いつも冷静でいること。36.4%。これ上位ですから。

下位の方に行くと、もっと悲惨であります。もっとも自信がないのは、数学的思考。15.3%。プレゼンテーション能力。17.2%。文章作成力。19.8%。リーダーシップ。21.4%。知性。22.7%。

要するに、4分の3は知性に自信がないのが今の大学生だと。高校までの勉強、これは山形大学もうちょっと高いかも分かりませんが、今回のサンプルでは23.8%しか自信がない、という状態に入ってきます。だから、かなり自信を持ってない状態が多くて、比較的自

信があるのが対人関係と努力すること、という状態に入ってきます。

6月になりますと、変化が見えてまいります。変化の兆候が一番大きいのは文書作成能力がですね、かなり上がります。19.8から27.5になります。高校までの勉強が不思議なことに上がります。これは悩みました。どういうふうを読むべきか。大学教育で高校のおさらいをしているから上がるのか、そんなことはありません。そうじゃないのです。周りを見て、大学にいったら困るぞと言われていたら周りもできないので、まあこんなものかと思って、ちょっと一安心という数字であろうかと思いません。

そういう状態でございますので、上のほうの項目を見てもほとんど、だから変わるの、一番変わり始めるのは、アカデミックスキル。その学習技術などというのは、2ヶ月の段階で自信を持ち始めるということです。ということは、その初年次の中の一つのパートである学習技術教育というのをやろうと思えば結果は出ます。

ただ、一つ先に申し上げておきますと、私どもの大学の同僚で、上村和美というのがありまして、彼女が中心となって作った学習技術の教科書は、現在日本の大学でもっとも使われている学習技術の教科書です。88大学でご利用いただいているようでございます。

その知へのステップという、ちは知識の知ですね。知へのステップという本なのですが、くろしお出版というところから出しておりますけれども、これがですね、一昨年の、一昨年出版して、一昨年の全国大学生協の売上全国13位だったそうです。結構その手の本としては売れて、CD付で2,000円しないという値段に助けられているということで、先生方も是非一度お試しいただければと思いますが、よくよく使われるのですね。ただし、使っているのは、一ツ橋とか早稲田も若干使っているようですが、ほとんどは一般大学です。

つまり、学習技術というのは実は、アメリカのFYEの中でも一番コンテンツとしてシェアが高いのです。というのは、セレクトティブな大学はセレクトティブな大学で本格的な論文の書き方を早く教えようとする。ノンセレクトティブで、読み書きの能力が極めて低い大学でも、リハビリテーションのために必要になります。じゃあやる内容がガラッと違うかということ、積み上げでございまずのでそれはやり方があるということで、コンテンツのシェアとしては学習技術が一番高い。で、なおかつそれは一定の効果をおげることができます。

ただし、学習技術をやったら学生の動機付けが強くなるか。これは私、別の大学に、大阪の私立大学に呼ばれて、FDで喋ってきました。「先生のところの学習技術の教科書はすばらしい、と思って導入しましたが、全然学生の動機付けが向上しません。」

先生、それは無理ですよって言いました。考えてみましょうか。料理に置き換えてみますと、料理の方法。料理の方法というのは、美味しいものが食べたい、美味しいものをどこかで食べたから、それを作るために中華料

理のナベの振り方をやれば、それは上手くなりますけれども、美味しいものを食べたことがない人間に対してナベのふり方をやったら、それはただ腕が痛くなるだけの話でございますので、技術というのは何かとセットでなければ効果を持たないということを、まず前提としてご理解をいただければと思います。

文書作成能力に戻りますけれども、これは急速に改善をいたします。で、これは対象大学にそういうことに熱心な大学、実は自分のところの大学ですが、ちょうどサンプルに入っているということもありますが、更に言いますと、次の項目で出てきますが、情報技術についてもこれは効果がすぐに出てまいります。従いまして、早くやれば学習に自信を持たせられるような教育というのはございます。しかしですね、対象集団全体の自信の構造は大きく変わりません。大学に最初に入った段階で、問題を抱えたまま入ってくる学生達は、非常に自信を持ち始めるなどということは、全くないわけです。

10月になって初めて成績をもらって、変わってくるのが2項目あります。自分はやればできるという自信が6.4ポイント上がります。それと大学の講義の理解力が約10ポイント上がります。

ということは、最初の半年というのは実に大事です。で、成績をもらった段階で、やればできる、あるいは講義が分かるようになったという自信を持つ学生を作れるかどうかというのは、先ほど言いました6月くらいから既に分化が始まっている。最初の半年の間にきちんと学習スキルを教え込むことができるかどうか。それと、目標や動機付けという点で何がしかの改善をもたらすことができるかというようなことで、半年の段階でかなり変化が起こるわけです。

このデータからすると、全体から見ると大学教育は失敗しているとは言えないですね。しかし、課題もたくさん分かってまいります。その辺りのものを除いたところ、大人になっていく、青年期の大人として、人間関係、先ほど言いましたSocial Integration、人間関係についての側面等々は、ほとんど改善しないまま先送りにしてしまっているということでもあります。

次に、入学後の経験というところをご覧いただきたいと思います。新生達達は、入学後の半年間でどのような経験を積んでいるのか、ということでございます。4月、6月、10月でこれも変化がおきていました。

網掛けをしているのが特に変化の大きな項目でございますが、まず4の段階で見ますと、授業後、内容について友だちと話をした、というのが一番多い経験だったのですが、49.2%。半数に満たません。相談事のできる相手を探した、42%。これは教員も友人も含めてのことです。3番目は、宿題をあまり一生懸命しなかった、というのが30%くらい。友だちと一緒に勉強したが24%。以下、授業に遅刻したが22%。授業中自ら進んで発表したのが2割に満たない。授業をサボったのもまだ17%。課題やレポートのためにインターネットを利用した、15%。個別の指導は7.2%。

待っているだけでオフィスアワーに来るか。難しいですね。基本的に日本人には、手帳もなければアポイントメント、考えてみれば手帳を持ってないので、人と約束するなどということをしませんから、思った時に来ると。教員の事情なんか関係ない。高校までは職員室に行ったら先生はいますから。それと同じ感覚で研究室に来て、先生はいつ行ってもいないと文句を言われるということでございますので、これはもうやっぱりやり方を考えなければいけないわけですが、ほとんどおりません。

ところが、これ6月になりますと授業後、内容について友だちと話すが、62.1%。宿題はあまり一生懸命やらなかったというのが、これ10ポイント増えますね。友達と一緒に勉強したがもっと増えるのですね。47.9に変わります。授業に遅刻するのも倍増。50%。授業中自ら進んで発表した、35%。授業をサボった。これもすごいです。約3倍近くになります。43%。

ところが一番増えているのがこれです。インターネットの利用が15%から72.9%これ2ヶ月です。で、これはこれくらいすぐに変化し始めるということです。

10月になりますとかなり落ち着いてまいりまして、まだ動いているのは、授業内容について友だちと話すが8割。インターネット利用が更に増えて79.8というところでもあります。4月から6月の変化で一番大きいのは、先ほど言いましたインターネット利用でございます。高校時代、そうしますと今の段階ではですね、去年の段階では、インターネットを使って調べてごらんと言われて、4月の段階では必ずしも調べられる状況にないというふうに考えた方がいいわけでありまして。しかし、ちょっと使い方を教えれば喜んでやるようになる。ということでもあります。

しかし、その情報収集のためのインターネット利用で、これと別項目で、コンピュータ活用能力に自信がありませんかということ、これは3割以下なのですね。今の大学生ぐらいは、インターネットで情報検索することがコンピュータ活用能力だとは思ってない。だけど、すぐにそこまでは行くようになるというだけのことであります。

4月段階の、ちょっとレジюмеに沿っていかせていただきますと、友人との接触というのが、先ほども言いましたように、半数だったものがどんどん増えてまいります。で、友だちと学習経験をシェアする人間が増えていき、授業中進んで発表するものも、十分とは言いませんけれども、19%から6には35%に増加してまいります。他方、ここでもやっぱり分化が見られます。慣れが、遅刻やサボリというネガティブな習慣に染まり始める者も示しております。遅刻、サボリ、こういうものが増えてくる。

したがって、4月から6月の2ヶ月というのは、学生が大学生活に適應するかどうかの一番重要な2ヶ月だというふうに考えていただければいい。では、そうした大学生たちは、大学生活に馴染んでいくという時、高校生との比較ということをしていかなければいけないので

すが、高校の時と比べて大学をどう見ているのかと。

私ども別にやった調査で言いますと、大学生活に対する満足度はきわめて低い、というのが日本の大学の調査、多くの大学でそういう結果が出ます。

数年前に高等教育研究という、高等教育学会の雑誌にそう書いたのですけれども、その中で数少なく比較的満足度が高いのは、先ほどちょっと申し上げました第一志望で入ったか、自分のどうしても入りたい学部学科であったところに入ると、多少ましなのですが、それ以外の大学生はもうほとんど惨憺たるものであります。

ところが、入学後の生活について、高校の時と比べてどうですかという聞き方をしますと、必ずしもみんな非常にネガティブな評価をするわけではありません。分野として、学習について、対人関係について、生活全般についての、3項目で評価を、6月と10月の時点でやりました。ちょっと省略しきった表で見難くて申し訳ないのですが、高校大学とも二重丸って書いてあるのは、高校の時もうまくいっていたし、現在も上手くいっていたというのが、最初の二重丸のところ。高校が黒で大学が二重丸というのは、高校の時は上手くいってなかったが、大学に入ったら上手くいっていると。で、その次は、高校二重丸で大学ペけにしているのは、高校の時は上手くいっていたけれども、大学に入って上手くいけなくなった。ペけペけはお分りの通りです。高校の時も上手くいかなかったし、大学に入ってもやっぱり上手くいかない。

高校大学とも上手くいったというのを見ていきますと、対人関係とか生活全般というのが約半数、54%、45%とそれぞれ出ていますけれども、大体上手くいっているのです。更に言いますと、高校大学とも二重丸と、高校のときにペけだったけれども、大学になって丸というのも加えますと、4月での対人関係でいえば、合わせますと74.5%は、対人関係は一応上手くいっているところでも答えるのです。

これは恐ろしいことですね。だけどなおかつ非常に不安で、なおかつそれが一番シリアスな問題なのです。ですから、我々が大学生の効能とかですね、活動をどう見ていくか。彼らはそこがまだ一番上手くいっていると思いたいところでもあるし、そこに一番関心が集中している。しかし、一番不安なのもそこなのです。上手くいっていると言っている一方でもっとも不安を感じているのも、そのSocial Integrationの部分だということです。

これはアメリカもかなり近いですが、日本の方がSocial Integrationに対する不安が強い。約10ポイントぐらい違いがあります。

生活全般で言いますと、6月の段階で高校大学とも二重丸が45.3ですね。高校の時は上手くいかなかったけれども大学に入って上手くいくようになったが14.3ですから、約6割は生活全般もまあまあ上手くいっていると。

上手くいっていないというのを見ていきますと、一番やっぱりシリアスなのは学習についてですね。この段階では、4月の段階で上手くいっているというのと、高校

の時は上手くいってなかったというのをいれて44%です。ところが、10月になりますとこちらは増えるのです。学習についてというのは。

これを見ていただきますと、これ学習についてですね。これ全部矢印、不等号がついています。高校の時に上手くいっていた者が増えます。4月は23だったものが31に増えます。高校の時に上手くいってなかったけれど、4月で上手くいき始めたというのが20.7から27.7に増えます。で、高校の時に上手くいっていたけれども、大学で上手くいかなかったというのが、36いたのが10ポイントくらい減ります。で、駄目な人はずっと駄目みたいですね。13%から15%くらい、高校の時も大学に入っても駄目な人がいますけれども。

そういうふうと考えていきますと、実は学習面での適応、アカデミックなインテグレーションというのは、方法がないわけではない。むしろ上手くいっている大学もあるということです。ですから、問題は4月から6月という過渡期と、それと背後に隠れているのが、単に授業についていけないとかということだけじゃなくて、人間関係も含めた大学に対する適応を図れているかどうかということでもあります。

そういう点から言いますと、お話の流れから言いますとですね、大学教育は学力低下に苦しんでいて、日本の大学は学力をつけさせていないという厳しい社会的批判の方に、我々がともすれば引っ張られているのですけれども、だからもっと授業でバンバン課題を出してしごいていかなければいけない。いかにして学習に向けなきゃいけないかということを考えてしまいがちなのですが、それで多くの大学が学習技術とか使っていただくのはよろしいのですが、どうもそれだけでは問題は解決しないのではないかとということでもあります。

対人関係とか生活全般というのが変わらないということは、日本の今までの大学教育が使ってきた手法では、対人関係や生活全般についてもともと問題は、先ほど言いましたように7割から6割なのですが、この人たちは動かないのです。

高校の時は上手くいっていたけれども、大学に入って上手くいかなかった対人関係の部分でありますとか、これ、20.7から17でほとんど減りませんね。2.3ポイントですか、要するに対人関係や生活全般について日本の大学教育はほとんど意識してこなかった、ということが言えるかと思えます。

では、そういうことに対して我々はどんな方法があるのか。例えば、これはいくつか持ってきたのですが、まずアメリカの大学のことでございますが、これ実はタイムマネジメントのですね、こういう薄いものがあります。これは大学が独自で作っているところは少なく、実は汎用的に業者が作っているのです。

勉強ができない学生に対して、こういうテキストが置いてあって、学習支援センターに行ったらただこれを持ってこることができます。あるいはそういうワークショップがあって、学生達に、要するに成績が上手くいか

なかった学生、あるいは希望する学生には時間の使い方とかということをやります。

中身を見ますと、一番最初がこれ、タイムマネジメントとは何ですかというふうに書かれています。タイムマネジメント、なんですかと。あなたをもっと自由にするための手段ですよと、簡単に言えば書いてあるわけです。普通考えると、スケジュールを組むという話になると、ますます自分の時間がなくなるような気になるかも分かりませんが、そうじゃありませんよと。もっと効率的に時間を使えばあなたにもっと自由時間ができますよと、そういう仕掛けです。

これ見ていただくとお分かりのように、まず我々大学、日本の大学が作るものと比べて飛躍的に、視覚的に訴えます。字が少ない。絵が多い。

タイムマネジメントが何でそれほど重要なのかといった時に、これは成績が良くなるかですね、あるいはもっと自由時間が持てるようになります。それとバランスのとれた生活ができるようになります。それと、もっと自分の締め切りが守れるようになります。そんなことが大体書いてあります。

これは、どういうふうにしてスケジュールを立てるのかということ、一番最初にまず、タイムマネジメントは本当に助けてくれるとまだしつこく言ってくれるので、その上で、これはですね、時間の使い方の診断テストが入っています。それでここで自己採点するようになっていて、自己採点すると、一番ひどいものになりますと、あなたの今の時間の使い方はカオス状態です。このままでは破滅します、と書いてあるわけですね。

それでまず最初にやるのは何かということですね、これ、大学の一応スキルなのですが、15分刻みでこういうふうに毎日1週間、記録をつけなさいと。15分刻みで、とにかくどこへ行くのにもノートを持って行くと書いてあります。そして、どんなことをしたかということ、まず書き出しなさいと。そして、それが本当に必要だったかどうかということ、あとでチェックしなさい、と書いてありますね。

次にしなければいけないのは、次にやらなければならないリスト。どうしてもその日でなければいけないこと、フィックスな事とフレキシブルなことに分けてリストアップしなさいと。終わったら全部消していきなさいと。

今度は自分のそのリストに対して、プライオリティをつけなさいと。A B C Dとプライオリティをつけなさいと。Aは非常に重要でその時にやらなければいけないこと。Bは大事だけれどAが終わるまで待てること。Cは今日でなくてもいいこと。ということをやりますね。

次。スケジュールを、自分の行動記録を1回分析してみるのですが、その時に自分が急がされていたかどうかというようなことも色塗りさせるんですね。その上で、もっとも1日の間に自分で上手くいっていたところ、これピークタイムと書いてありますが、自分をもっとも活き活きとしていた、一番効率が上がった時間を色塗りさせます。

学生たちに聞きますと、おそらく今の大学生は、高校生もそうですけど、半分以上の学生は、私は夜型と手を挙げるんですね。どうして夜型と聞くと、もう学生パニックになります。なぜかという、単純に夜遅くまで起きているという、その夜更かしをあとづけて言っているだけです。

ところがこれは違いますね。ピークタイムが午前中の人は、そこが一番効率が良いということ、まず色塗りしなさいと。それで分からせる。それで、要するにさっきのスケジュールを組む時には、一番自分のピークタイムにウェイトをつけて、高いものを持ってくるようにしなさいと言っているんですね。例えば音楽を聞きたいのだったら、ピークタイムの逆ですね、もっとも自分が集中できない時間帯に音楽を聞いたらいいじゃないかと。一番頭が働く時間帯に、なぜそんなことをやるのか。

それともう一つ書いてあるのは、プライオリティAのことをスケジュールに組む時には、その後ろにスケジュールを無理に詰め込まないということですね。例えば授業が終わったら友達と映画を見に行く約束があって、「先生ごめんなさい。このあと映画を見に行くのでお先に失礼します。」これをさせないような組み方をするといいことですね。

ほかに書いてあるのは、どういうふうにコントロールするかということ、音、静かなところで勉強しろとかそのようなことを書いています。

次には、どういうふうな秘訣があるのかということ、友達に今日は忙しいと言わなければいけないとか、あるいは、友達が来ないようなところにこもって、勉強しろとかね。等々のことが書いてあります。

それと、あと書いてあるのは、ご褒美を約束しろと書いてあります。ご褒美を。つまり、いつまでにこれが終わったらこの日はみんなで、私は友達がレポートを書いている締め切り2日前に仕上げるという計画を立てて、それが達成できたら、この日は美味しいものを食べに行くということをスケジュールに入れておくとかね。あるいはもう最初から無理をしなくて遊ぶ時間、例えば日本の小中高でやるみたいに、まず午前中勉強してから遊びに行けではなくて、暑くなってから遊びに行きたくないです。暑い時間帯に勉強したっていいわけですね。部屋の中だったらクーラーがありますから。そういうその時間の組み方の秘訣をいくつかここに書いてあります。

例えばこういう要素というのをですね、やっぱりかなり継続的に色々なところで目に触れさせるようなものがいっぱいあります。

ほかの物もちょっとさわりだけ見ていただきますと、これはですね、セルフエスティ。どういうふうにして自分に自信を持つかというこういうプロシャがやっぱりあります。リスペクトユアセルフ。自分を大切にしましょう。こういうものも、やはりこの自己診断テストが右側にできますけれども、自分にどれくらいあなたは自信を持っていますかというのがあります。ほかにあと持っているのは、これはアルコールとキャンパスライフ。

アル中、ドラッグでいかにしてキャンパスを去らなければいけなくならないようにするかということですね。アルコールを飲んでキャンパスで強くないよという話ですとか、あるいはアルコール問題というのは、キャンパスでどういう悲劇をもたらすかとかですね、これ車の事故の場面とかですね、こういうものも使っていますし、これはですね、ストレスマネジメントですね。マネージストレスフォーカレジットサクセス。大学で成功するためにどういうふうにしてストレスをコントロールするかということで、ストレスとは何かから始まりまして、ストレスをどう管理するかということをお話すると。

これはですね、考えてみますと、日本ですとどういふところでやっていたりしたかですね、大学で。ほとんどやっていたりなかったり、本当に疾病を持つとカウンセリングセンターとか保健センターに行くのですが、これが割と簡単にいたるところにあって、これを渡して、これを使って実は初年次教育の中でこれをやることも可能になるのです。

多くの大学は、さっき言いましたタイムマネジメントは入れています。タイムマネジメントというのは、だから誰でもできるようになるのだから、自分の物の考え方だよ、ということを使って、要するに大学生活になると授業を順繰りにとっているだけではすまないわけですから、こういう要素を取り込むというのが、実は初年次教育的な要素で、なおかつ、最近アメリカの大学で非常に多用されているのは、集団で学習させるということです。ラーニングコミュニティという方法だと言われています。

ラーニングコミュニティというのは、学生を集団で授業をうけさせる。で、先生方に分かりやすいように言いますと、自分の基礎ゼミとかですね、1年生のゼミのユニットで、授業を順番にとっていくかせる。共通に、一緒に勉強させて、相互に教えさせるというような。アメリカの大学のシステムというのは、先ほど言いましたように既にユニバーサル化に突入してからこういうプログラムを導入していますので、個々の学生の能力が高いというですね、オプティミスティックな前提に立っていないように私は思います。

日本の大学の先生方は非常にオプティミスティックです。そういう点から言いますと。やればできる、一生懸命やれば終わる、ということをおっしゃったことはございませんでしょうか。私もどちらかと言いますと気合で授業をする方でございますので、集中力が足りないとかと言っていますが、考えてみますと、これはもうさっきの10%あります。高校の時も駄目、大学の入っても駄目。

その子たちが、最後に残ってくる問題になってくる子なのですけれども、その子たちに、やればできるということをお話前提にやっていくとどうなるかということ、最後はやっぱり困るわけですね。

じゃあ最後どうするかということ、ユニバーサル化したらこんなことを言う大学の先生がいました。「いや、成績。勉強しないと困る。それは点数を甘くつければみんな進

めるよ。」と言うのですけれども、ただ考えてみましょう。出てない学生に単位本当に出せるのでしょうかね。試験受けなかったら単位出せないですよ。今抱えている問題というのは、ユニバーサル化でそういう学生が出てくる。いくらでも出てくるのです。

これはあの、先生方もお聞きになられたことがあるかも知れませんが、山形大学はカウンセリングセンターっておありになりますか？ 保健センターでカウンセリング。いかがでございますか。増えていませんか。増えていきますよね。今ものすごく増えているのです。どこのカウンセリング室の人と話しても、店を開ければ開けただけ客が増えるという。

これまでうちの学内でも大変もめたのですが、これは問題のある学生がどんどん入ってきている。多分それもあると思うのです。メンタルな、特に私どもは臨床心理のコースが結構あったりするので、そこに来る子たちはそもそも問題を元々持っている子が来たりするのですけれども。

ところが老舗のICU、国際基督教大学から聞きますと、「いや、そんなことはないのです。」と。「これは広げたら広げただけ、来るのです」と。

それと今の世代は、その学校カウンセラーをどっかで見てきています。接触してきていますから、カウンセリングを受けるといふことに対するタブーがないのです。自分がその心の悩みを持っているということについてタブーがないので、おそらく山形大学もどんどん増えていって、おそらくカウンセリング室で足りなくなると今度は保健室に行くという状態が、増えてくると思われるのです。学生の数は決して増えないのに、どんどんそういうサポートを必要とする学生が、多様化して増えていくと。

その時に、あの1つが、だからその集団を活用する方法ということになります。ちなみに私どもの大学の話をするのは大変お恥ずかしいのでありますが、時間も比較的まだありますので、少しそれを見ていただきましょう。

私どもの大学は、吹けば飛ばすような大学なのですが、初年次教育を4科目でやっています。初年次教育のために使っている、1つは学習技術というもので、2単位でやっております。週2回やっています。ほとんど今専任でやっています。ネットワークが使える教室でやっています。狙いとしては、聞く、読む、書く、調べる、整理する、まとめる、表現する、伝える、考える。この6つの柱を設定しております。評価方法はワークシートをしょっちゅう出させて、ワークシートで40%。小課題10%。最終課題10%。専用テキストを買っていただくようになっていまして、ノートブックを何回か持たせておさせる。

内容はこんな感じになっておまして、学習技術、第1回目、ガイダンス。第2回目、学習技術とは。講義を聞いてノートテイキングをするが3回目。4回目、概要・要点を読み取る。要約から感想・意見を聞く。情報収集。レポートを書く。分かりやすい表現。パソコンに

よるライティングスキル。プレゼンテーションの準備。分かりやすいプレゼンテーションのために。これが週2コマあります。それと情報の科目は別にありますので、その時間も含めて、それが週1回あります。

うちの一番の特徴にしていますのが、これが学習計画法という、これがその初年次教育の、アメリカの大学で言いますと、その初年次教育の科目の一番代表的なフレッシュマンセミナーとかファーストイヤーセミナーが、私どもでいうこの学習計画法なのですね。

これはですね、学科全員でチームティーチングと、ゼミ別の形態と併用しているのでございますが、実は2科目、この学習計画法というのともう1つの基礎演習というのを2時間、これ連続で同じメンバーでやっていまして、90分授業、2コマ連続でやっています。

ですから、ちょっと両方見ないと分かりにくいところがあるのですが、学習計画法の方は最初に何をやるかという、自己発見というのをやっています。これは、自己分析を大体させます。そういうワークシートを作っていて、自分の目標設定と自分の性格特性とか、そのことを自分で自覚してもらおう。

それが終わりますと、私どもの学科が人間行動学科と言いますので、将来進路として出て行きうる職場について、どういう仕事や資格があってというのを、大体やっていくようになります。福祉、心理、教員。

それが終わりますとですね、これとてつもない金をかけているのですが、学科の学生全員を4泊5日で韓国へ連れて行きます。ゼミの教員も全員一緒に行きます。提携大学へ行って向うで、実はリサーチをさせるのですが、この科目全体がラーニングコミュニティで大体4人くらいの学生のグループを、ゼミの中をさらに分けて、このラーニングコミュニティ単位でリサーチテーマを決めて、事前学習をして向うへ行って、韓国で日本語をやっている学生についてもらって、フィールド調査をやるというようなことをやっています。

狙いはグループワークと異文化に対する気付きなのですね。多様性に対する気付き。

それで、企業に対する話があって、後は前半話を聞いたらね、今度は学外見学で、将来関係ありそうな、しかし心理学やりたいからといって心理学のクリニックに連れて行くわけじゃありません。もうちょっと幅広く持たせようということで、ほとんど福祉施設です。教員になりたいといっても福祉施設。要するに人と関わる仕事というのが人間行動学科のカリキュラムですから、人と関わるチャンスをできるだけ増やしていこうと。

それを戻って来てから振り返りをして、ポートフォリオという、時間があればちょっとお話ししますが、学習の記録を4年間通してつけさせるのですけれども、そういうものにまとめさせるように。

行って帰って来たらそこで振り返りをまず小集団でやらせて、それをゼミでやらせて、そのゼミでやった分をこの次の基礎演習の中で、こちらと連動しているのですが、それで振り返りをやります。こちらの方はちょっと

連動しているので重複します。で、自己発見がありますが、全体で話をしてやり方を教えて、あとはこの基礎演習というゼミ単位で、自分たちの分析をさせると。自分の成功体験、失敗体験を書かせると。性格特性、学習週間のアンケート、これは我々の分析用のものですけども。

それと、あと韓国についてはこの準備がかなりあります。さっきは突然韓国にいったように見えますが、裏番組ではこういう形で韓国の文化について単位を決めて、事前学習をして実際に行くこと。

そのあとは、見学の時は2コマ使わないといけませんので、あとはその振り返りとかをやっていきます。で、自分たちの全体で、自分たちのやったものをまとめて、ゼミの中ではその4人くらいのグループの代表がまず喋って、その中で1チーム選んで、これを学科全体、今200弱ですけども、その200弱で、そのそれぞれのゼミの代表でプレゼンテーションのコンテストをやるというような構造を取っております。

それで、そんなことをある程度やっていかないと、で、我々は何でこんなことをやっているかと、手間かかるんですけども、要するに、人間関係を作りながら自分たちの関心を深めていく方法を作っていくしかない。これは学科によっても違います。おそらくこれ教育学部でやるのもっとやりやすいですね。教員になりたいという志望が固まっているとすれば。しかし、そうじゃない学生がいるとしたら、組み方が変わってきます。というふうに、そういうことをやるのが課題であり、また実際のやり方なのだろうと思います。

これからの日本のそのFYEの課題ということを最後に申し上げて、お話に変えさせていただきたいと思えます。

まずそのリテンション問題の日本での現実化の可能性ということでございます。私はあの、これはかなり現実に近い近づいてきているのではないかとこのように予想しております。日本における大学中退率の変化というのを見ますと、過去20年間では中退率最低だったのは、1976年入学者の12.2%です。この学年は4年卒業率が76.1%。5年卒業率が85.2%です。これは、あの学校基本調査に出てまいりますのは、4年卒業率って分かるのですが、ただ非常に分かりにくいのは、編入学の問題が途中から大きくなってきているのですね。データを見ますと、学校基本調査は入学年次の該当学年の数が4年後卒業何人したか。5年でどう、6年でどう、7年でどうとデータは出てくるのですが、編入学がその途中で増えていっている部分を、どう分けて、分析できないという恨みがあります。

ちなみに私立大学の場合、1年生から2年生、2年生から3年生と学生数が減っていきます。特に1年生から2年生。2年、3年は増えています。ごめんなさい。1年から2年では減るのですね。中退者が増えます。

ところが国立大学はですね、1年生から2年生の学生数が増えるのですね。編入学の方がやめる数より多いと

ということですね、現状としては。それもあるのですけれども、その後その卒業率というのを見ますと、89年から93年の卒業生は、大体卒業率が92%くらいまで良くなりますね。ピークは91年入学者なのですが。ところが、93年入学者あたりから卒業率というのが漸減していきまして、97年の入学者では4年卒業率が8割を切ります。79%です。で、5年卒業率で見ましても87.1%にしか達しないということです。97年入学生ということは、2001年で4年を迎えた学生ですね。もうこのあたりの分しか出て来ていません。で、6、7年の卒業生については、2006年卒業生、2007年卒業生の詳しいデータはまだつかめていませんので、それを考えていきますと、どうも実感として見るとですね、悪くなっているのじゃないかと。

確かにこの大きな流れから見ますと、景気の良い時の留年率は低いです。景気が悪くなると、1年待った方が特じゃないかということで留年する学生は増えるのですが、しかし5年卒業率まで見ると、大体傾向がつかめるのです。1年しか留年しませんから。就職のために留年する人間は2年留年しませんから。そうすると悪くなりかけてはいませんか、ということです。

実はこれはあの、文科省がですね、調べようとしたそうです。いくつかの国立大学をパイロットで調べたら、余りにも悪いので止めたという話です。思ったより悪かったそうですね。一応現在OECD2000のデータベースにでている部分でいうと、日本の大学中退率は11%という形になっているそうです。それが、イタリアが67%と並んでいるものなのですが、実際はそれより悪化し始めているのじゃないかと。

悪化し始めると、最初に申し上げましたように、学費収入の重要性を考えていった時に、シリアスになって。シリアスになった時にはもっと大騒ぎになりますよということになります。

2番目の課題としましては、2006年問題に代表される、更なる入学者の学力低下・多様化に対する各大学のカスタマイズした目標・方法の設定を組織的に行う必要と書いてあります。

山形大学と関西国際大学は違うと言いましたね。設置している学部学科も違います。志望順位も違います。周りの環境も違います。自分の大学の環境とか、自分の大学がどういう人材を育てようとしているのか。来ている学生の実態、ニーズはどんなのかということをお考え合わせると、より力点をおくべきポイントが見えてまいります。

それが分かってくると、どういうその組織体制でやればいいのか。要するに学習支援センターだけつくれば問題は解決するのか。1日でやっているオリエンテーションを3日に伸ばせば問題は済むのか。あるいはその、春学期全体が問題なので、前期の間に少し組織だった形をとるのか。

組織だった形をとる時に、先ほど私ども学科全体でやっていると言ったのですが、個人でやると準備するのが大変なのです。外部講師の交渉から見学先のあれまで考

えていきますと、かなり大きなユニットで手間がかかります。手間がかかるのですが、一方である程度組織ができますと、担当してもらった教員については、だんだん楽になってきますね。お膳立てをかなりしてもらえますから。ですからそういうふうな、組織でやればそんなに大変じゃない。個人でやろうとすると、とてもじゃないですがそんな多様な課題に対応できるはずがない。だから組織目標にあった、そのカスタマイズをどうするかということが、戦略性をもって考えられる必要がある。

3点目はですね、アメリカと異なって通学生が多数派の日本の大学を考えると、なおかつ学部学科を決めてくる日本の大学生に対しては、こんなプログラムは有効かというふうな疑念が起こりうると思います。さらに言いますと、最初の学期を乗り切ったらそのままいくということなのですが、現状から考えると、それはそうはいかないわけですね。

これは実はアメリカでも、これは日本の、我々のほうが反応が早かったのですけれども、2年生向け、3年生向け、4年生向けの、継続型のプログラムで刺激を与えないとやっぱりもたない。そういうことを考えていかなければいけない。特にイギリスでありますとかオーストラリアやニュージーランドは、学部学科を決めてきますので特に難しいです。

現状からいきますと、オーストラリアやニュージーランドでは、正規授業の枠に学部の壁が高くて入れてもらえないので、共通のオプションでやっている。授業外でやっているというような大学の方が多いです。あるいは入学前に、インテンシブに、どうぞ皆さんお越し下さいというような、中には危ないと思っているターゲット学生に特に招待状を出す大学とかですね、色々なやり方があります。しかし、いずれにしても直輸入じゃなくて環境、目標、組織特性をある程度考えた戦略的な選択が必要になってまいります。

で、最後に、初年次教育のプログラムを開発するための条件ということ、4つだけあげさせていただければと思います。

1つは、高校から大学への移行期の持つ重要性と、初年次の体験の重要性が、組織内で共有されること。これは実は結構大変な問題なのだ。1年生の間くらいほっとさせておいてやれよ、という気持ちをお持ちの先生方もおられると思います。しかし、実態を把握していきますと、決しておそれる時期ではないということについてのコンセンサスがあるかどうか。

2点目はですね、初年次学生の実態を知ることです。我々がたまたま4月、6月、10月とやりました。それ、実はこの秋、1年後をやりますと。おそらくもう1年後もやりますと。卒業したあともやろうと思います。こういうふうな個人を特定していきますと、今度はいなくなった学生の分析をしようと思っています。消えた学生はどういう学生だったのかということです。時系列分析というのは、多くの大学の場合、多くの研究者がやるのは、1年後に別の対象学生を調査するとか、あるいはそ

の母集団がどう変化したかということキャッチできない。これ我々の場合は協力していただいた大学のご配慮もあって、学籍番号をデータに入れていますから、どの学生がどう変わったかということを一応追っかけられると。ところが、これ追っかける分析はなかなか手がかかるので、まだ本格的にはこれからなのですけれども、そういうそのことを、それぞれの大学、一般的な私が申し上げたデータと山形大学のデータは違うはずですので、そういうことをきちんとしないといけない。

それと次は、内容と方法についての情報収集と共有です。先ほど申し上げたような私どもの例がベストとは思いませんけれども、かなり情報を集めてノウハウ蓄積するのに時間がかかっています。

先ほどご紹介いただきましたように、初年次教育研究開発センターというのを日本で初めて作りました。それは自分たちが研究をやる、あるいはワークショップを、そのうちお金もらおうと思っていますけれども、ただでやることじゃないと、アメリカはこれで食っているやつがいますので、そういうことをやってもやっぱり必要になってくる。普及する必要があるし、また調査をやったノウハウを蓄積していくことが非常に重要になってきます。個人の先生のノウハウを、個人の先生ノウハウとして留めておくと、こうしたプログラムはだんだんしんどくなってきます。

4番目はですね、評価方法の開発です。これは、あのグッドプラクティスもそうなのですが、もう今は評価、評価と。第三者が評価する時のポイントというのは、大体3つだと思います。レフリーサイドで見た時にほぼ3つだと思います。

1つはコンセプトの明確さです。これは何のためのプログラム。何を狙いにしているのか。これが1つですね。これはあの、ほかのも共通して言えると思います。

2つ目は、このコンセプトに対して、実施されたプログラムが、果たしてどの程度改善されつつ継続されてきたのか。始めたばかりじゃ駄目だと。やっぱり何年かやってもらわなきゃ駄目だと。これが2つ目ですね。

3つ目は、それが有効であるかどうかという有効性を証明しなければいけない。これが今キーなのです。で、これが現在の日本の大学教育の外部評価の段階を見ると、非常にあいまいな尺度しか皆さん持っていません。だから、評価を明確にしながらプログラムを設計することが必要になってきます。

例えばリテンションというのは一つの評価です。じゃあ定量的評価だけが評価かということそんなことはありません。多くの大学はそういうのがないと、すぐ学生の作文を都合よく2,3通出してきて、こういう学生が喜んでおりますと。これは相手に対して通用しません。例えばグループフォーカスインタビューというふうな形で、一応組織化されて、どういう基準で選んだ学生がどういうことを言った分析なのかというものが、定量的なデータとあわせて組まれているというようなですね、そういうその評価のやり方を作らなければ、教育プログラムが第

三者から評価されるということはない、というふうに申し上げても良いのではないかと思います。

4点目は、それが社会的な影響力という観点から言えば、他大学が参考にしたいようなものかどうかということです。これはあの、世知辛い世の中でございますので、昔の大学関係者の間です、ノウハウを聞きに行くとなるとですね、3,000円の菓子折り1個持って行ったらただでべらべら喋ってくれるといった世界だったのですが、だんだん世知辛くなっていますのでそう簡単に教えてはもらえませんが、しかし、やっぱりそういうものをきちんと積み上げてやっていくということは、必ず必要になってくるのではないかと思います。

参考文献をあげさせていただきましたが、最後に入れるのを忘れておりました。私の科研の報告書。ここに持ってきております。これ1冊、小田先生のところに。ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究ということで、この3月に科研でいったんまとめさせていただいたものでございますので、これは置いて帰らせていただきますので、またご関心のある向きはご覧いただければと思います。

時間でございますので、以上で。私、授業評価で早口が弱点でございます。長い間、暑い中ご清聴ありがとうございました。

司会 どうも濱名先生ありがとうございました。

お願いしていた時間ちょうどで終わられて、さすがだという感じです。では、残された時間でご質問をご自由にどうぞ。実に分かりやすい問題提起から初年次教育の背景、さらに具体的にどのように解決するかということ提示していただきました。

はい。どうぞ。あの、記録の都合上、所属とお名前を教えてください。

須賀 教育方法等改善委員会の教育学部、須賀と申します。

大変、示唆に富んだお話で勉強になりました。最後に色々な試みをただでは聞くわけにはいかないということで、ちょっと聞くのもためらわれるのですが、関西国際大学では学習支援センターを設置していらっしゃる。なおかつ、初年次教育もされているということで、当初の学習支援センターの問題点が、その初年次教育をされたことによってどのように変わってきたか。あるいは役割が変わってきたのかということ、もし教えていただければお願いしたいと思うのですけれど。



濱名 学習支援センターの悩みをお話するのが一番早い

と思います。最初はですね、学習支援センターを作りました時には、本当はリメディアルをやるとういうようなこととかですね、あとは学習相談ということで個別の相談に対応しようと。利用者はですね、増えません。来ないですね。

2年目からやり方をちょっと変えまして、2年目に始めましたのがショートプログラムというやり方ですね。

ショートプログラムというのは、その個別相談から考えて、ニーズのあるものに対して、向うもなかなか最初のハードル高いですから、誰でもいいですよ、ただで、というので、1日とか2日とか数回までのプログラムを学習支援センターの名前で提供し始めたのですね。

そこから始まったのが実は学習技術というさっきの授業でして、一番最初は講義の攻略法とノートテイキングというのを1回ずつでやっていたのですね。そうするとそれ結構学生が来ました。ノートの取り方がよく分からない。つまり、大学の教員の板書というのはですね、だいたい始末に終えないと。横に書いたり斜めに書いたり、書いてはすぐ消す。教育学部の先生方が、中高の先生方に教えられる板書とはもう程遠い板書をしてしまうので、これがやっぱり取れないと。要点が拾えないと。そこから始めています。

そのショートプログラム、最初3本だったのですが、今回そのGPの中ではそれが増えたことも評価していただいていますけれど、今18本くらい、去年の実績で18本くらいやっていますね。中にはその、もう何でもいから、その学習支援ということをあまり狭く考えるなど。

最初は我々、学習支援というのはできない学生のための支援をするのが主たる目的だとイメージを持っていたのですが、そうじゃないのですね。優秀な学生は優秀な学生として授業でカバーしてもらえないことに対するニーズがあると。あるいはその生活上の悩みが学習の悩みの原因になっている場合があると。

ということで、例えば今やっていますのは、下宿生のための料理と健康とかですね、そのような講座もあります。これはしゃれなのですけど、私がかたい荒らしているのですけど、タイムマネジメントもやっています。あとやっていますのは去年、これはたいしたことなかったんで失敗だと思うんですけど、確定申告のやり方とかというのをやりましたですね。あの、これ必要だということで。これは時期がちょっと直前過ぎたのかも分かりませんが。後は公務員の受験対策をやりたい学生のためとか。そういうプログラムができました。

それをやった上で次にやり始めたのは、その中でさらに授業にできるものがある。つまり、3回とか1回じゃなくてももっと継続してやって欲しいというニーズがあるものについては、特別研究ということで全学共通で学習支援センターが授業を起こすという形で授業の形をとるようになりました。それは要するに、学部学科のカリキュラムに入れてくれと言ったらはねられるし、教養教育ですかと言われると、こんなのいかがわしいかと言われるような、それこそ進路に関わるようなものについ

ては、そういうところから始めて行きました。

今私どもがやっていますので言いますと、スタジアムロードって海外に行って自分たちでリサーチをする、2年生、3年生向けのプログラムがあります。今年、ベトナム、アメリカ、中国、韓国とあるのですけれど、4人くらいのグループで調査テーマを持って、面接を受けて、それを通れば費用は全部大学持ちと。あの宿泊費と交通費を出してやると。このような、この上の層を狙うプログラムと平行してやるようになりました。

しかしそれらの、その辺は多数派ではありませんので、最大公約数の学生に対するやり方としては、先に学習技術をやって、その上で先ほど言いました学習計画法や基礎演習をやっています。

それでどの程度問題が解決されたかと言いますと、個別相談自体はそれほど多くなってきました。かなりその、こちらもニーズが拾えるようになってきたので、特別研究であるとか、ショートプログラムの利用者が増えていっている状態です。我々とすれば個別相談というのは、基本的にニーズを拾うためのものだと。できる限りそういうパッケージというか集団のグループ学習に落としければ、多様な手間が省けていくと。アメリカと同じなのですけども。

そういうやり方から見れば、そこそこまで来ていますが、最近の状態から言いますと、大学のサバイバルが忙しくなってきた、一応前教員が学習支援センターで自分の研究室でのオフィスアワーとは別に、センターオフィスアワーというのを持ってもらうことになっていますが、始めた当初で85%くらいの出席率が、最近色々忙しいとちょっと70%ちょっと切りそうな状態で、その辺がちょっと課題として出て来ているのですが、効果として、先ほど自分で効果の話をしながらお恥ずかしいのですが、抜本的に非常に良くなったということ言えば、そうですね、リテンションも目覚しく良くなったなどということはないですね。あの、悪くはなっていないという程度で、これからちょっと初年次のGP取るには、先生のご質問に明確にお答えできるように1年間精進したいと思えます。

司会 はい。ではほかにご質問は。

はいどうぞ。

仙道 どうもありがとうございました。

学長の仙道です。

あの、リテンションはその大学の経営に関係するということからだけではありませんで、興味深く聞かせていただきました。



その Social な Integration の強化というのが非常に大事だということをおっしゃって、最初にアメリカの色々な例をこう、時間の使い方とか、心身のこととか。アメリカと日本は違うぞということをおっしゃって、先生たちの例を示されたわけですね。で、その話を聞いていて、例えばですね、山形大学でそういう Social Integration の強化をしようとした時にですね、どういうその、理論的などと言いますか、何かこういう仕事はトライアンドエラーと言いますか、あるいは何かの真似をするということから始まるのかもしれませんが、やはりこう、ある程度何というか理論的な背景があってですね、それに基づいてやらないと、その評価の時になってもですね、何か難しいよというようなことではないかなということを考えながら、お話を伺っていたのですが、その辺もし何かご示唆いただけることがあればお願いしたいのですが。

濱名 初年次教育の、このジョン・ガードナーが始めた業界は、ある意味ではですね、学会というよりはムーブメントの力が非常に強いです。

評価に関する問題で言いますと、アメリカの場合ですと、一番持っているのは retention になってきますね。で、スチューデントサティスファクションとか、あと卒業先の評価でありますとか、卒業生の評価でありますとか、それと学生自身の能力がどう変わっていったかということ、を、だいたい追跡したりしてやっていますけれども、非常に特色があると思いますのは、その、体験色が非常に強い。

だから、かつてはフレッシュマンセミナーというその授業ですね、私どものやっていたような。ああいう授業の呼称であったものが、Experience で広がって行って、体験を重視するということと、グループワーク手法というのがかなり今使われている。

したがって、その何というのですかね、継続プログラムとして同種のもの、それは F Y E と今は別にまだなっているのですが、インセスプログラムというのは、そうですね、コミュニティサービスという、地域と連携するプログラムであるとか、先ほどのスタジアムロードでありますとか、インターンシップでありますとか、共通しているところはアクティブラーニングというその手法。

もう一つは発達理論をベースにしているのだと思うのですね。青年期の発達段階にあった形での刺激を、アクティブラーニング手法等を使いながらやっていくということで、それ以外には、あのそんなに明確な、理論的な、

そのガードナーが書いているくらいの話で何人かおられますけど。

それでアメリカの場合ですとそれを標準化したテストとかですね、調査の書式があって、それで一応比較をしてやるというようなやり方でございます。

日本の場合まだそういう点でいうと、議論的なところから未整備なところを我々が埋めていく使命があると思っております。

司会 はい。どうもありがとうございました。

時間となりましたので、まだいくつか質問おありかもしれませんが、それはまだ濱名先生いらっしゃいますので、午後からも聞いてください。すばらしい基調講演をいただいた濱名先生にもう一度盛大な拍手をお願いします。

どうもありがとうございました。では、昼 1 時からラウンドテーブルをやりますので 1 号館に。お昼にゆっくり休まれてまた午後から活発な討論をしてください。ありがとうございました。

(120分)



第2部 ラウンドテーブル

ラウンドテーブル1：e-learning について

コーディネーター：櫻井 敬久教授（学術情報基盤センター）

ラウンドテーブル2：口頭コミュニケーション能力の育成と
能動的学習について

コーディネーター：立松 潔教授（人文学部）

ラウンドテーブル3：YU サポートシステムについて

コーディネーター：須賀 一好教授（教育学部）

ラウンドテーブル4：英語教育の改革について

コーディネーター：丸田 忠雄教授（医学系研究科）

講師：岩部 浩三教授（山口大学）

【ラウンドテーブル1：e-learning について】

コーディネーター：櫻井敬久教授（学術情報基盤センター）

大学の資源の第一は教育資源である。その資源は、教育ポリシーに基づくカリキュラムであり講義そのものである。これまで我々は、自らの専門性を背景にして講義内容をつくり山形大学という限られた空間の中でその教育資源を学生に提供してきた。しかし、情報通信ネットワークは、この教育資源を一気にインターネットの世界に展開することを可能にした。e-learning には電子媒体による学習という広い意味があるが、端的に言えば教育コンテンツという教育資源をデジタルネットワークにのせてヴァーチャルな講義や演習を実施することであり、当然情報通信ネットワークシステムと密接に関係することになる。

このような状況の中で山形大学は、1)本学の教育にどのように e-learning を活用できるのか。2)本学の教育資源をグローバルに展開するとき e-learning をどのように位置付けるのか。これらのことを検討しておくことは重要である。

ここでは、e-learning コンテンツとしてのドイツ語学習（人文：渡辺先生）とストリーミング配信実験（センター：奥山先生）の実践的事例を参考に山形大学の e-learning について議論して頂きたい。



【ラウンドテーブル2：口頭コミュニケーション能力の育成と 能動的学習について】

コーディネーター：立松 潔教授（人文学部）

新入生が大学教育にスムーズに移行できるようにする転換教育の重要性が指摘されています。「山形大学のあるべき姿」では、転換教育の中心課題を「受動的学習から能動的学習への転換」であると捉え、さらに、教養教育の段階で少人数クラスにおける討論・発表・提案能力の育成の場を設けることの必要性を提言しています。

しかし、そのための具体的な教育方法については、必ずしも教員間で共通認識が形成されていないのが現状です。そこで、このラウンドテーブルでは、今年度前期に実施された学生主体型授業である「日本社会の解剖」の経験を紹介し、学生の能動的学習への誘導と、口頭コミュニケーション能力の向上のための授業方法について検討してみたいと思います。

まず、「日本社会の解剖」で実施した、班別グループ学習、短時間スピーチ、ディベート、モックインタビュー（模擬記者会見）の内容と成果を授業担当者立松が報告し、いくつかの論点に絞って参加者の皆さんからの率直なご意見をいただきたいと思います。



【ラウンドテーブル3：YU サポートシステムについて】

コーディネーター：須賀一好教授（教育学部）

ラウンドテーブル3では、今年度から開始した「YU サポートシステム」について取り上げます。「YU サポートシステム」とは、新たに導入したGPAを有効に活用しながら、アドバイザーと学習サポート教員とによって、学生の修学や生活を総合的に支援していることとする本学の支援体制の名称です。まだ開始して4ヶ月の段階ですが、ラウンドテーブルに取り上げることによって、この制度のあり方や運用について、現時点での話し合いを行いたいと考えています。

ラウンドテーブルでは、最初に、アドバイザー制度と学習サポートルームの現在までの状況について報告が行われます。その後、参加者がいくつかのグループに分かれてディスカッションを行います。以上の話し合いによって、本学の支援体制の維持発展させるべきところや改善すべきところ、あるいは留意すべき点などを探って

いこうと思います。



【ラウンドテーブル4：英語教育の改革について】

コーディネーター：丸田忠雄教授（医学系研究科）

講師：岩部浩三教授（山口大学）

本ラウンドテーブルでは、TOEICの導入など大胆な英語教育改革で知られる山口大学から岩部浩三教授（大学教育センター）を招き、その取り組みを参考に、本学の改革の方向性を探してみたい。

私の知る限り、教養部廃止後、全学的なレベルでこのようなテーマの会が催されるのは初めてのことであり、まずは喜ばしいことである。しかし本学の英語教育には難問が山積していることを考えると、遅きに失したと言わざるをえない。

教養部廃止後、英語教育は教養教育実施委員会の手によってかろうじてコマ数だけは揃えられきた。しかし人文学部・教育学部に分散した担当教員を束ねる仕組みがない必然的な結果として、本学の英語教育は、単位数が半減しただけで、内容面では平成8年以前と何ら変わりが無いといえる。担当専任教員減、非常勤講師時間等の目前の脅威もあり、アカデミズムに軸足を置きかつ語学も教えるという現在のシステムは早晚破綻することは明らかである。ではどういう道が残されているのか。



第3部 全体会

「山形大学における新たな取り組みについて」 (各ラウンドテーブルの報告)

司会(元木) それでは、午後の全体会を始めたいと思います。司会は人文学部の元木でございます。よろしくお願ひいたします。



多分不手際がいっぱいあると思いますが、どうかご容赦をお願いします。ちなみに、各テーブルの報告書が入り口のところにありますので、まだ手に入れていない方はどうぞお願ひいたします。入り口のところです。

それでは、午後に4つのテーブルに分かれまして、ラウンドテーブルということで、具体的な4つのテーマについてご議論いただきましたが、その議論をまず参加者の共通理解とするために、各テーブルから報告をいただきます。各テーブルのコーディネーターの方々よろしくお願ひいたします。それでは、テーブル1のe-learningについて櫻井さんお願ひいたします。

櫻井 ラウンドテーブル1, e-learning についてというセッションです。こちらについて、私、櫻井が報告させていただきます。

最初に、報告者としては学術情報基盤センターの田島さんが、ハードウェア的なシステムについてお話していただきました。

次に小田先生と渡辺先生、小田先生は高等教育企画センターで教育学部ですが、それで渡辺先生が人文学部です。この問題が活発に活動されまして、ドイツ語のe-learning コンテンツを作って、ストリーミングで流したと。

その実用的な、実際のネットを通して、その模様を流して参加者の方に見ていただきながら、講義をしていったということです。

最初にバックグラウンドとして、私は少し e-learning の状況、国際的な状況とか日本の状況と政府の政策とか、このあたりを少しお話ししまして、田島先生が「e-learning を支える networking and computing system」ということで、具体的なストリーミング配信の技術的なこと、それから著作権、それから今後重要になるだろうということで認証システム、このあたりのシステムがらみの話をしました。

そのあと小田先生がかなり e-learning、これはですね、国立の情報メディアセンターの吉田先生がかなり外国の状況を調べているのですが、それと対比させて、山形大

学ではどういうふうにやれるのかということで、e-learning そのものは今後どうしても大学としては避けて通れないということであろうと。ただ、具体的にやっていく時に我々ノウハウを積み上げなければいけないだろうと。そこで実践的に人文学部の渡辺先生と協力してコンテンツを作られたと。その具体的なコンテンツを作る時の色々な注意点とか、考えなければいけないこと、そのあたりをかなり定義するようにいたしました。

それに基づいて実際に e-learning のコンテンツをネットワークで流して見ていただきながら、そのあと渡辺先生が、実際は講師になって内容を作られたわけですが、そこでどういうところに気を付けて、どこがしんどかったとか、そのあたりをかなり具体的に出していただきました。

渡辺先生がこれを作る時には相当準備をされていて、ある意味ではリハーサルとかということをして、実際に結果は皆さん既にご覧になった方もいらっしゃると思いますが、相当綺麗にできています。

綺麗にできているという意味は、非常に少ないお金、ほとんどスタッフは、いわゆる講師は渡辺先生で、撮る方は小田先生がやっています。ある意味では素人がこういうものを作った割にはですね、放送大学に匹敵すると言ってもいいのではないかというような綺麗なものができています。

綺麗というのは単に絵が綺麗ということではなくて、授業そのものが非常に見ている側から分かりやすく、それから単にある人の顔が写ってただ漫然とした講義ではなくて、非常に臨場感溢れる講義となっています。そのあたりはお二人の努力が非常に大変だったのではないかなと思うのですが、ある意味では逆にお二人、こういうスタッフでもできるのだなということがよく分かりました。この辺は今後、我々が山形大学で e-learning のためのそういうコンテンツを作っていく時の非常に参考になるところだと思います。

もちろん教員に全ての負荷をかけてはいけないので、その辺は考えなければいけませんけれども、必ずしもものすごいお金と環境でないと作れない、ということではないということがよく分かったということです。

それで、そのあとは参加者の方から35分くらい、色々ご意見をいただきました。参加者の方は人文、それから農学、教育、工、から参加していただいています。それから山形大学以外では東北芸工大の方が参加していただいて、計8名の方で色々議論しました。

その議論のかなり重要な点としては、こういうストリーミングの e-learning コンテンツはじゃあ放送大学とどこが違うのかという、かなり根本的なお話がありました。

ここでは、基本的には変わらないと。ただ、目的を我々はどこに置くのかということで、2通りあるのではないかと。

1つは山形大学の学生に向けたこういう e-learning コンテンツを開発するということは、それは相当意義があって、それはいわゆる自習とかですね、そういうことに

相当役立つのではないかと。

もう一方では、非常にすばらしいコンテンツを作って、外へ発信していくと。この場合には外との競争も当然起きてくるわけですが、結局求められるのは中身が重要であるというようなことのお話が出ました。

それからあとは、こういう e-learning を今後使っていく時に、遠隔授業の方でも使っていけないかという話で、システムとかハードウェアとの関係ですが、リアルタイム性を追及するような授業にも使えるのではないかと。

例えば、一例が農学部の方からこちらへ流す時に、季節感を盛り込んだ授業を大学とやる場合にはやはりリアルタイム性を要求するので、そのような授業にも使えるのではないかと。



それから最後に、少し e-learning とは違うのですが、実際にこれから我々 e-learning から情報処理教育の中に、色々な著作権の問題とかですね、色々こう倫理の問題が出てくるので、そのあたりは学生に対してきちっと協力する体制を作っていかなければいけないのではないかと、という意見がありました。

これで大体、もっと色々ハードの話とかあったのですが、非常に実際のサンプルもあって、有意義なセッションだと思っています。以上です。

司会 ありがとうございます。

全体会の進め方について、若干ご説明申し上げますが、コーディネーターの方に報告をいただきまして、それから会場から2、3の質疑応答をいただきます。そのあとで次に進めさせていただきます。全体が終わりましたらもう一度元に戻って、全体的に質疑応答をしようというふうに考えております。

というわけで、今の櫻井さんの e-learning についての質問、あるいはご意見などございましたらよろしく願います。ちなみに、手を挙げて、それからご所属とお名前をおっしゃってから、中身をお願いいたします。いかがでしょうか。

はい。

中村 教育方法等改善委員の、人文の中村です。

e-learning というのは、今日までのところ、このタイプの配信授業のことを言う名称に特化されてきているように思うのですが、色々なレベルがあるのではないかとと思うのですよね。

インターネット上で、例えば、資料だけを出すとかですね、講義録を出すとかですね。あるいは動画を使わな

いで、パワーポイントのようなもので流していくとかですね。色々なタイプの授業があるかと思うのですが、e-learning のそういう多様性ということに関してはどうなのでしょう。現状では、開発状況としてはどのようなものなのでしょうか。

櫻井 はい。その話も少し後半に出たのですが、結局今回の講義としては小田先生が中心になってストーリーングをやられて、かなり成果があったと私は思っています。

で、あと、e-learning、ご指摘のようになりかなり自習の要素であるような、そういうコンテンツを用意して、学生に自習させようかと。そういうものはやはり e-learning の範囲としては非常に重要な部分だと思っていて。これはどのくらい気を付けているかというのは大学全体の話であると。それぞれの学部等でやっているところもあると思います。

ただ、一応私もセンター長という立場で申し上げますと、センターとしては今年度新しい学術情報基盤センターになりましたので、この中の情報教育メディアということで、一種その自習的な要素の e-learning の開発をして行きたいということ。

その最初のターゲットとしては、先ほどありましたように情報倫理とかですね、そのあたりを、あまり難しいようなものを情報処理教育の中に導入していくような、そういうものを現在考えています。

司会 それでは、ほかにどなたかいらっしゃいませんか。例えば芸術工科大学の方は色々試みをなさっているように思うのですが、いかがでしょうか。

では次のテーブルに移りましょう。ラウンドテーブルの2ですが、口頭コミュニケーション能力の育成と能動的学習について。立松さんのご報告をお願いいたします。

立松 はい。ラウンドテーブル2では、私の方から今年の前期に開講いたしました、日本社会の解剖という授業の総括をいたしました。

この授業は色々欲張った内容で実習いたしまして、1つは口頭コミュニケーション能力、これを育成する場。具体的には討論とか発表の能力。プレゼンテーション能力も含む、そういう能力を育成するという。それから学生がですね、主体的に自ら課題に取り組んでいくと。それからその課題自身を学生が見出して勉強すると。こういうことを中心的な教育目標に掲げてあります。

ただこれは、私、経済学の専門なものですから、同時にですね、現代の日本社会、経済学から言うとちょっと教養の学生には狭いかなと思いましたが、現在の日本の社会の色々な問題について、皆さん関心を持ったことに取り組んでくださいと。こういうことで行ったわけです。

その学生主体型での取り組みということなのですが、グループでの取り組みということを主体にいたしました。聴講生40名の、42名ですね、学生がいました

ので、平均 5 名のグループ、8 班にいたしまして、グループでまず課題を決めて取り組んでもらうと。それを全体会、みんなの前で発表してもらおうという形で。

その発表の形態がですね、1 つはディベートです。これはほかの班と対抗試合という形で、テーマを合わせてもらいまして、ディベートをやってもらいました。これを全部で 4 試合ですね、8 班ですから 4 試合やりました。

それから、そのあとでモックインタビューという形式。これはインタビューというと分かりにくいのですが、模擬記者会見ということである課題について共同で調べて、時間の関係です、1 時間で切って 1 コマで 2 つの班にやらしてもらおうということで、普通は我々、ゼミでも卒論の発表とかですね、レポート発表などやらしてもらおうのですが、そういう時には 1 人が 15 分とか 20 分とか、長時間の発表をするのですが、ここでは短い、1 人大体 3 分、1 班 5 人ですから 15 分ということで、それぞれこう立場を変えてですね、その同じ課題について取り組んでもらって。それを司会進行係が質問に答える形で、その 1 人 3 分を使ってもらう。1 分ずつ 3 回でもいいわけですが、そういう質問に対して答えるというスタイルで、共同で調べたことについて発表してもらおうというやり方であります。

テーマは、ディベートでは日本は小学校に英語教育を導入すべきであるというテーマ、それから、日本は小児脳死移植を認めるべきであるというテーマ。それぞれ 1 試合ずつ。それから、日本は死刑を廃止すべきであるというのが、4 チームがこれに取り組みましたので 2 試合ですね。で、行われました。

それから、インタビューは色々なテーマありますけれども、例えば地球温暖化論というのは正しいのかどうかとかですね。あるいは高速道路無料化の是非とか、小児医療をどう立て直すべきとか。それぞれグループで課題を見つけてもらって。これは、もともと日本の論点というテキストがありますので、そのテキストの中から自分たちの関心のあるところを取り上げてもらって、共同でそれ以外の文献とかインターネットなどで調べて報告するというのであります。

結果的に見ますと、ディベートについては高校までに経験している、あるいは経験はしていないけれども知っている、そういうものがあるというのを知っているという学生がほとんどでして、割とスムーズに取り組みたのではないかと感じております。それから、事前にですね、実論を調べて公開しあうというようなことで、その立論のところ、こちらで学生に、実際に私のところに持って来てもらって、アドバイスをしたりチェックをしたりするということもできましたので、そういう点でもかなり良かったと。

ただ、モックインタビューの方は学生が戸惑った面がありまして、初めなかなか上手く行きませんでした。2 回ほどちょっともたもたしまして、ちょうど公開授業がそれと当たってしまって、もたもたぶりを公開授業で公

開するみたいな形になってしまったのですが。その後学生が大体こつを掴みまして、その後発表する班の中には、かなり良い内容のものが増えてきたように思います。それから、最初でかなり学生の総合評価でも低い点数だった学生、一番最初の班ですね、これもう一度最後にやらしてもらいましたら、かなり良くできておりましたので、私の事前の指導と、学生もその辺の狙った内容を十分に理解していなかったことによるものであると。やり方によってはかなり上手くいくのではないかとこのように思いました。

そういうようなことを私が報告しましたあと、会場からの質問などいただきまして、あと、意見交換などをさせていただきました。

参加者 23 名でして、他大学からも弘前大、福島大、芸術工科大学、秋田大の方々ですね、5 名ほど他大学から参加いただきました。

質問を非常にたくさん出されまして、十分に整理しきれないのですが、まず多く出されたのが、そういう授業の場合、成績評価をどうするのかという質問が何人から出されました。

というのは、私もちょっと 1 回目ですので悩んでおりました。専門の方ではこういうディベートなどを取り入れていたのですが、専門はまた同時に卒論指導などを行いますし、レポートも別に書かせておりますので、そういうことなので評価はさほど悩まないでわりとやっていたのですが、この 1 年生にやるとですね、実際に今回、学生の発表などと、それから学生自身のアンケートを見ますと、そのグループごとにですね、非常にまとまりの良いところと悪いところが出てまいりました。

発表でもですね、それはかなり顕著に差ができたということで、どういうグループがちょっとこうパフォーマンスが低いかという、例えば責任者と言いますかグループリーダー、班の責任者ですね、これをジャンケンで決めておるものですから、その責任者がちょっと欠席がちになってしまうとかですね、そういうふうなところがなかなか、どうもまとまりが悪く連絡もお互い取り組んでいないということがありまして、発表でも、ディベートの時もですね、なかなかスムーズにいかないというようなことがありました。

そういうグループごとの評価と個人ごとの評価を、ウェイトをどう置くのかというようなご質問もあるように思います。それから、こういうのは発表の中身とかそういうものを評価していくことになって、いわゆる平常点というようなつけ方になるわけです。

私の場合には、ディベートとそれから最後のモックインタビューですね、30 点、40 点という配点にしております。それから、ディベートのちょっと前にグループごとに、ワークショップと言ってですね、共同で作業をして、これは入学直後ですので山形大学の印象ですね、山形大学の新発見というテーマで、そういうのでちょっとワークショップと言ってですね、グループごとに山形大学について不満点とか、それから入る前の感じと入った後で

どうだったかと。こういうようなことを議論して、まとめてもらうというようなことをやりましたのでその分が20点。あと、司会を担当したり、班ごとに司会を担当したり、色々運営の方も学生中心になってもらっていたので、それについて評価をすると。そのようになっております。

ただその辺、個人の評価とですね、グループの評価、どういうふうに組み合わせるのかとかですね、あるいは平常点でどこまで、教育目標と合わせてですね、成果というものを把握できるのかという点について、ということになりますと、実はまだ成績つけておりませんし、ちょっと今まで授業をしながら個人的にメモをしてはいるのですけれども、だいたい非常に目立つ学生ですね、中心になって取り組んでいて、がんばっている学生と、それからちょっとパフォーマンスの低い学生と、その辺は分かるのですが中間段階のところの微妙な採点というのは、グループの評価と合わせてどうするのかというのはちょっと今悩んでいるところですので、その辺、そういうようなお答えがちょっとできなかったということがあると。

それから、ここで私が言いましたディベートとかモックインタビューのようなものは、分野によってそういうものを取り上げやすい分野とですね、自然科学系、理論物理とか、そういうような難しい分野があるのではないかとというご質問がありました。

これについては、私もほかの分野のことよく分かりませんのでなかなか答えようがないのですが、ごく一般的に言って学生に課題を与えてですね、あるいはいくつかの課題の中から、学生に自分たちの課題を見つけさせて、そして調査研究、あるいはフィールドワークなどを主体的にさせるというようなことであれば、これは色々なやり方があるのではないかとというふうに思いますし、現にそういう授業もあるように聞いておりますので、あまりこのディベートとかモックインタビューとかですね、そういうのにこだわらなくても私はいいのではないかと。学生の能動的参加を促すですね、ということではそういうことがあるのではないかと。

あと口頭によるコミュニケーション能力なのですが、これは、ちょっと私、前に大学教育学会というのに出席いたしまして、そういう口頭コミュニケーションの授業を担当されている方のお話を伺ったのですが、先生方ですね、見本を見せようと思ったり、あるいは具体的な上手なしゃべり方、話の仕方、そういうことを教えようと思っただけはいけません。大体日本人というのは皆そういうの下手ですし、大学の教員と言ったって、そういうのが上手くて教員になっているわけではない人がほとんどですので、そういうことではなくて学生自身に、お互い評価させる。

私の場合もスピーチですね、プレゼンテーションスピーチをやらせれば、学生同士に分かりやすかったか。あるいはテーマについて説明する場合の構成が良かったかどうか。それは学生自身に、相互に判定をさせ

るというようなことをやっております。もちろん、私も感想を最後に言うわけですがけれども、そういうようなことをやりますと、お互いの評価というのが非常に気になるわけですね。

それから自分自身が、どこかちょっと欠点がある、どうしても顔を上げて話すことができないという学生もいます。それはいってもですね、恥ずかしくないとかですね、これはやっぱり慣れだろうと思いますので、やはりこういう人前で発表する時間、これはすごく長くなくてもいいと思うのですね、2分でも3分でもいいのですけれども、半期の授業の中で私の場合ですと、スピーチとそれからモックインタビュー、ディベート、それから班ごとの成果の発表とかですね。そういう発表をするから、なるべく短時間ではあるけれども、数多く置いて、そういう場がそれなりにあればですね、その中でやっぱり慣れていくのではないかと。



だから、そういうことで口頭コミュニケーション能力と言いますがけれども、これは場数を踏んで憶えるということではないかと思っております。

それから、グループ学習の中での人間関係の比重が大きい。現に非常に上手くいったグループとですね、そうでないグループがあったわけですが、ここをどう扱うのかという質問もございました。

これについては私自身、後のほうになって、これはだいぶ差があるなど。アンケートをやったですね、余りにも大きな差がついてしまったので、それからアンケートの自由記述欄にも、自分の班はなかなかまとまりが悪くて苦労したというようなことが書かれてあってですね、もうちょっと早く気付いて、そういうちょっとパフォーマンスの低い、あるいは欠席、学生が欠席すると、そのあと連絡取り合って自分たちで相談するということができないというかできていない班があったものですから、その辺りのケアを早めにやっておくべきだったかなというふうに反省はしております。

このグループ学習、非常に上手くいくとですね、その中で中心、リーダーシップを取れる人間ですね、リーダーシップの重要さというのを学んできたり、あるいは、お互いに役割分担の中で共同でやるこの喜びと言いますがね、結構そういうものが面白かったと、充実していたという、後で聞いてみますとそういう入学生が多いですね。

グループによっては非常に学生同士で楽しく議論をしておりますので、あまり、こういう授業ですと教員の、我々はどちらかというところ控えめな、授業全体の設計をす

る、それから全体会をやるですとか、そういうようなことをやるのですが、何か脇役的で、学生主体型の授業ですので、ちょっとさびしいなという、私が授業をして、自分が主人公で、学生が面白かったとかですね、言ってくればちょっと嬉しいのですが、学生主体型授業で面白かったと言われてもちょっと、何か自分の力じゃないような、学生自身ががんばってやったという、ちょっとそういうギャップは感じましたけれども、やってみた経験で言うと、非常に上手くいったところが多くなったと。

パフォーマンスの低いところをどういうふうにかきんとケアしていくかということ、きちんとやっていけばかなり成果が上がるのではないかというふうに感じております。

以上、私の方からの報告を終わらせていただきます。

司会 第2テーブルからのご報告でした。

質問ございましたらお願いいたします。

山口 教育の山口と申します。ちょっと質問なのですが、先生のその口頭コミュニケーションの授業ですが、これには留学生等はどのようなのでしょうか。また参加を認めるのか。

立松 はい。今回はですね、1回目の授業に集まった学生を全員引き受けてやったのですが、留学生はおりませんでした。特に留学生を排除するとか、そうことはありません。また過年度生も6人ほど、7人ですかね、おりました。

山口 そうですか。個人的にはね、どうしても我々日本の文化というかコミュニケーションというのは歴史が浅くて、そういったところにもしかしたら欧米、西アジアからの留学生等が入ってみると、その日本人の場合、意外と個性という物が反映されて、話し好きだとか話べたとかありますね、そういったところに留学生等が、もしかしたら意図的に入っていただいて、そういった組み方で進められると、違った意味で面白いパターンが見えたりして勉強になるのかなというのが一つありました。

すみません。もう一つあるのですが、例えばほかの学習、ワークにせよ、例えば情報にせよ、それなりの、言葉は悪いのですけれども将来的に卒業した場合に就職等、何かそういったものに対する損得ではないのですが、あるというような形を一つの動機付けとして結び付けることが多々あるのですが、この口頭コミュニケーションに関しては、先生はどのような位置付けで生徒に、それは、要するに授業をこれから転換教育という中でと先生おっしゃっていますけれども、大学生活を送っていく上でプラスということを強調するのか、その後社会に出てうんぬんというような言葉も用いながら進めているのか、ちょっとお聞かせください。

立松 はい。専門の学生にも同じようなことをやっておりますが、その学生には、就職活動の面接などの対策にもなるのだよということは言っておりますが、1年生でするのでそこまでは言っておりません。

ただ、一般に山大生、わりと口下手だと、私も就職の対策委員をやった時に、企業を回りますとそういうふうになんて言われてですね、東京の私立大学の学生などの方がよっぽどこう、アピール力があるよと言われたものですから、もうちょっとその辺、山大は重視していった方がいいのかなと、1年生の時からです、重視した方がいいのかなということは感じておりました。

ただ、むしろ今回感じたのは、入ったばかりの学生ってお互いに知らないわけですね。その知らない学生がグループ学習を通じてですね、非常に親密になったり、いい刺激になったりということがありましたので、そういう意味では1年生の友達関係とか、山大というところに慣れるとかですね。

そういう意味では、この授業の目的とはちょっと違うのですが、副産物とでも言いますかね、そういう効果はあったのかなと思っていますので、その辺はもう少し今後意識しても、先ほどの初年次教育ということで、人間関係ですね、4月から6月の段階が重要だということがありましたので、そういう位置付け方でやって行くということもあっていいのかなとは思っております。

司会 ありがとうございます。ほかにどなたかいらっしゃいませんか。

それでは次に行きましょうか。

テーブル3ですね。YUサポーターティングシステムについて、須賀先生お願いします。

須賀 はい。ラウンドテーブル3では、YUサポーターティングシステムについて取り上げました。

午前中にご講演いただいた濱名さんにも加わっていただいて、ワークショップということですから、自由に話し合うという、そういう活動をしようということで、2つのグループに分けて話し合いをするということを中心にいたしました。

最初に私の方から、かいつまんでYUサポーターティングシステムの概要について説明をいたしました。そのあと、私、学習サポートルームの運営委員でもありますので、その運営委員会の報告をいたしました。

それから、アドバイザー連絡委員会からの報告を中西さんにさせていただいて、かろうじてまだ4か月ではありますけれども、現状での途中経過を報告したと。

それに基づいてそれぞれの参加者に各グループで自由に、その意見、あるいは感想等述べていただいて、今後の山形大学のこうした学生支援のあり方を明確にして行く、あるいは取捨選択して行く上での参考にしたいということで、話し合いをいたしました。

全体会に至るまでの記録は中村さんに、綺麗にまとめて書かれていますので、この資料を使わせていただい

て、簡単に報告をさせていただきます。

この資料の裏になりますが、それぞれ各グループで話し合いを約40分でいたしまして、その結果をまず報告しました。それに基づいて全体会をしたわけですが、それぞれのグループからの内容を報告いたします。

まずAグループですが、このサポートシステムの問題点としては、せっかく作ってもですね、結局本当にサポートを必要とする学生がなかなか乗ってこない。このシステムの中にこう出てこないと言いますか、要するに学校に出てこないという学生も含めて、どうしたらいいのかというようなことが話し合われて、それについては、濱名さんから関西国際大の例を教えてくださいました。

関西国際大では、確か6週目だったと思いますが、出席の管理を集中的にして、それによってアドバイザー等が動くということ。やはり早い段階で二極化するようですから、やはり早い段階でこういう対応をする必要があるだろうということが出ました。

2番目は、山形大学のような分散キャンパスの場合、こういうサポートシステムはどうあるべきだろうかというそういう話題になりました。これも短時間ですので、そう深められたわけではないのですが、やはり全体として動く部分というものが是非必要だろうと。リソースとしては全学、そして個々の運用は部局、各学部でというのが、やはり実質的ではないのかなという、そういった意見です。

それから3番目は、サポートファイルの運用の仕方について色々意見が出ました。これも学務情報システムが、これも動いて動き始めたわけで、その中の一部として機能しているわけですが、これはやはり、やりながら色々改善すべきところは改善して行かなければいけないというところで、現在動いて行ったということが、報告されました。

面白い、他大学の色々な面白い試みも濱名先生から紹介していただいて、例えば、学生自身が記入するというようなやり方もあるようですし、また、どういう項目での相談があったかという全体の概要がつかめるものは電子媒体で、色々細かい部分は紙の媒体でというような、そういう使い分けもされている大学もあるようです。これもやりながら色々工夫するようになるのではないかといいことです。

これに関連してですね、結局、全体会でちょっと出た話も少し先取りしますが、やはりどの大学も、その大学の環境に合わせたものをまず見極めて、そしてそれで動く必要があるだろうということが、痛感いたしました。そういったものを現在は色々実践しながら探っているという状況だと思いますので、それをこれから、はっきりさせていく必要があるのではないかといいふうに個人的には感じました。

それから、先へ進みますが、4番目ですが、学生の集団を機能させるという、活性化させるという面も必要であろうと。教員対学生ということだけではなく、学生同士、かつてはそういうものも自然的にあったわけですが、

それがなかなか最近難しくなっているという、そういった面をこうフォローする必要があるのではないかといいことです。

それから、5番目はですね、やはり色々機能が多様化しますと、結果的にそのたらい回しになってしまう場合がありますので、学生から見たらですね、やはりそれはサービスになっていないわけで、ワンストップサービス、なるべくそういう形でできる方法が良いのではないということ。こういったことがグループ内では話し合われました。

それからグループのBからは、やはりアドバイザーとなる教員は、実際に授業等で常に接する教員が良いということで、例えば工学部の場合では、アドバイザーの教員をどうするかといったことをこれから考えて行く必要があるのではないかといいことが出ました。

それから2番目は学習サポートルームの認知度ですが、あまりよく知られていないようである、ということでやはりPRする必要があるのではないかといいことが出ました。

3番目はですね、サポートルームにはテレビ電話システムが備えられているのですが、まだ十分使われていないということがあるので、検討する必要があるのではないかといいことです。

それから4番目はAグループと同じでした。

5番目は、アドバイザーのカウンセリング力、カウンセリングマインドと言ったらいいのでしょうか、そういった心を持つための研修など必要ではないだろうか。

6番目は、やはり学習サポート教員というものが、多面的にですね、活動するためにも独自の権限を与えても良いのではないかといい点が出ました。

それに基づいて、今度は全員のラウンドテーブルで全体会をいたしましたが、それについて簡単にご報告いたします。

まず認知度の問題が話し合われました。で、工夫の一つとしてはですね、やはりこういうことがサポートできますよということ、もう少し具体的に学生に知らせる必要があるだろうと。こういう場合はここへどうぞというようなことを、具体的に示す必要があるだろうということが一つでした。

それから、関西国際大の実例を教えてくださいまして、年度当初にキャンパスラリーを行って、その時にですね、学習支援室にも来るようにスタンプ、スタンプは押しませんけれども、そこに来るようにしていると。全部揃うと、ご褒美が付いていまして、食券がもらえるのだそうです。それはなかなか、それはそれで面白い試みだなと思ひまして、大体20から25%くらいの学生が全部回っているようです。そういった色々な形で、認知度を高める工夫の余地はあるのだろうと思ひました。

それから次にですね、学習サポートルームの機能のさせ方についても話し合われました。本学のやり方は、本学の先生はご承知だと思いますが、もう少し時間帯を広げたりですね、あるいは特に昼休みを使わせるというよ

うな工夫もあるということが分かりまして、まだまだ改善の余地があるということが認識されました。

総じて、やはりこういったサポート体制は負担がかかるわけです。教員側ですね。そういった問題をどうクリアして行くかということで、最後は残った時間、色々濱名先生にも教えていただいたのですが、やはりこういう組織としてサポート体制を敷くことは、大学全体としてメリットがあるのだということを認知してもらおう。そういう意味での認知が必要ではないかということです。

つまり、個々の先生のエネルギーですね、そういったものを消費させないといいますが、無駄なエネルギーを使わないためにも組織的な対応が役に立つのだということ。それから学生側から見てもですね、いざとなればこういうシステムがあるのだという安心感を持ってもらうという、そういう面がある。

そして、我々全然意識しなかった第3はですね、これはやはり中途退学者が出ると収入にも関わるわけで、それがひいては我々の研究費等、給料にも関わるわけで、そういったものを確保する上でもやはりドロップアウトしないようなシステム。きちんと付加価値をつけたといいますが、実力をつけた学生を送り出すというそういうシステムというのが、結果的には我々に役に立つのだ。そういった認識をまず全学で共有すべきではないかという貴重な意見をいただきました。

こういったことで、濱名先生にも引き続き講義をしてもらうというような形も考えられたのですが、ワークショップとして全員で色々考えていることを話し合うということで、ラウンドテーブル3は終わりました。以上です。

司会 ありがとうございます。

蔵王の合宿の成果を何か分科会でも活かしたような報告でした。

質問、ご意見ありましたらお願いいたします。

伊藤 教育の伊藤です。ラウンドテーブルの方でもちょっとそれめいたことは言ったのですが、例えば教育学部の場合ですと、1年からですね、各専攻コースごとに各学年単位というのが置かれていまして、それでまた教室としても専攻の学生一人一人として対処しているのでけれども、本来これは、YUサポーターシステムという教養教育時代のサポーターシステムについての議論なので、それが十分に機能するということがとりあえずの課題だと思うのですが、やっぱり少数の学生から見るとやはり、4年間学業の期間を通じてですね、多分そういう学校側の色々な機能が有機的にこう、絡んでサポートしていくというふうなことでね、将来考える余地があればいいなと、いうふうに僕は思っています。

ただそれを無難にそう続くかというのが、色々な懸念とか、役割分担とかね、あるのでしょうかけれども、それがないと、漫然とやっているという感じになっちゃうよ

うな気がするのですよね。

全学的なそういう、4年間の一貫したそういうシステムに向けて何か考えというのがあるのかないのか。教養教育の時に対応すれば、それはそれでね、個別的な対応で終わってそれはそれでいいのだという、何かそこから情報があっても別にそれはそこで止まっている形でいいのだということなのか。

須賀 これは、そういうスタッフ作業に携わった者についての意見ということになりますが、このネーミングそのものですね、これ教養教育ではありません。山形大学全体のそういう学生支援システムということで作っておりまして、今年初めて1年目ですから、1年生のアドバイザーということになりますけれども、最終的にはもちろん大学全体のサポートを機能させようというのが願いで、議論しています。

ただ、1年生はやはり教養教育をこの小白川キャンパスでうけると。で、1年次が大事であるというようなことであって、その、全体の中での占める比重は確かに大きいのですが、あくまでも全体のシステムを機能させようと、そういうことではあるわけです。

司会 システム自体を、これは完全に4年間想定したシステムだと私は受け取っておりましたので、どうも認知度がもう一つのございます。

ほかにいらっしゃいますでしょうか。

それでは第4テーブルの報告に行きましょう。英語教育の改革について、丸田さんお願いします。

丸田 資料を見ながら、私の報告を聞いていただければ、ありがたいと思います。資料は丸山先生にお願いして、作っていただいたものです。

このワークショップでは「英語教育の改革について - 山口大学の改革から学ぶ - 」というタイトルで、山口大学から岩部浩三先生をお招きしました。で、岩部先生は、新聞の細かいところまで見ている人はもしかしたら気付かれたかもしれませんが、つい先ほど、平成16年度の特徴ある大学教育支援プログラム、新聞にも報道されたわけですが、そこで山口大学のTOEICを活用した英語教育改革、教育水準の保障と学習支援で、このプロジェクトがそれに採択された。で、その申請者なのであります。非常にいいタイミングでお招きして、お話を伺ってきたということでもあります。

いいタイミングということはどういうことかと言うと、やはり山形大学の要求というのが、色々な面で改革を待っているというような状況があると思います。

1つは、学長が午前中のご挨拶でちょっと言われていましたが、英語教育は昔は、いわゆるアカデミックリテラシーと言えるでしょう。要するに教養教育ですね、あの難しい哲学の本と一緒に読めるとか、当時ですね。そういう英語を読むこと自体、すなわち西洋の古典的な教養を身に付けることにもつながるといって、今そういう状

況では全くないわけです。グローバル化とか、いわゆるコミュニケーション重視とか、専門家特化とか。

で、本学の希望での、それに応じた質的な軽さというのが必要となっているのですが、本学ではちょっと問題が増えているというところがあります。

それから、もう1つは非常勤講師以下の減ですね。それとか英語の担当教員の後任問題とか、それぞれ、あまり明らかにするとまずいところもあるのですが、非常に自治体制が危なくなっているというのがありますので。

そういう問題もあっていい機会じゃなかったかと思えますし、ちょうど連動して、山形大学の中期目標中期計画の平成16年分の計画までいって、英語教育担当委員会というのが設けられて、色々その教育改善に向かって議論するということになっております。それ自体その非常にタイムリーであったかと思えます。

で、まず最初に、本学の英語教育の現状と問題点をその参加した人たちに感じていただくために、人文学部の大河内先生から10分程度のお話をいただきました。

山形大学の教養教育実施委員会が中心となって、人文学部、教育学部に所属している英語を担当することが可能な先生からですね、コマ数を集めてくれたような感じなのですが、それを最終的に、そのコマ数を非常勤講師のその色々つけてですね。で、授業をするわけですね。で、そういうシステムでずっとこれまで続いていますけれど、なかなかそれ以上の議論が進まないのですね。そういうシステム上の問題点があると。それで要するに、現状の要求をまとめて練られている。格好としては運営体制が、教育目標の明確化とか、あるいは学生が望むのはコミュニケーション重視とか、そういう点に対応して行くというのが指摘されました。

それを受けて、岩部先生にトークをしていただいたのですが、山口大学、TOEICは、英語教育の柱として、1つの教育方法として利用していると。で、これに基づいてですね、その資料の裏のページを見ていただきたいのですが、スライドの1枚が抜粋されておりますけれども、これは岩部先生に最後にまとめていただいたスライドなのですが、一粒で三度美味しいというようなことで、これは、このあと説明しますが、そういう成果が得られたということでもあります。

で、最初からTOEICありきでは決してなかったということで、検討した結果TOEICが一番いい掴みだったと。色々な意味での指標であると。そういうことでTOEICをやったということです。

で、ざっと、どういうその授業をされているか簡単に説明しますが、一応、クォーター制になっているそうです。これ英語だけなんじゃないのかな、その辺詰めてお聞きしなかったのですが、まず6月までTOEIC準備なのですね。そういう授業で、そこで最後に中心の、週1コマですから、で、6月にいっせいにTOEICを受験すると。これは、自己負担になりますけれど。

そこで得られた成績に基づいて、今期、第二クォータ

ーなのですが、そこで学生を振り分けると。で、600点以上が単位認定していると。もう来なくてもいいですね。ちなみに山口大では6単位、1コマ2単位で6単位。それから600から400点の間は、一定の単位を認定して、これもちょっとあやふやなのですが、多分1コマだと思っておりますけど、それだけで補充できるわけです。それから400点以下が、基準を満たすまでがんばらねばならないということですかね。ちょっと私もあやふやになってきましたが、こういう様式が支持されているというわけです。それが、4年の間でそのハードルを越えるようになっていきますね。最終的には落ちこぼれる学生は非常に僅かで2%であるとおっしゃっていました。

だから、考え方は英語教育、あるいは非常勤時間、そういう資源を中位、下位の学生に集中するという、そのようなシステムと考えていいと思います。

で、なぜTOEICを、そういう教育方法の柱にするかというのは、その今ご指摘した、スライドも見ていただきたいのですが、まず、厳格な成績評価ができる。TOEICの成績は、これは明らかに客観的な数字ですので、全く厳格。担当者の裁量が入る温情とかですね、好き嫌いが入る余地が絶対無いということですね。

それから、コミュニケーションの修練。これはTOEICというものは、リスニングを中心とした問題が中心ですので、逆に読みとか文法が入るわけですが、リスニング、時間的には半分入るわけです。そこで、リスニングが確保できると。

それから習熟度別クラス編成ができる。これは従来はできる学生もできない学生も一緒という、同じクラスでやっていたけれど、一応6月の段階で、クラス編成テストが行われるわけですので、そこでできる学生、できない学生、そういう分けられたですね。

それから目標の明確化。これは底辺学生でもTOEICを何度か受けると、最終的には7,80点くらい上がるそうです。TOEICで、そういう形でその学生の英語力を伸ばしたという。これは伸びるのだぞということですね。

それから卒業時の付加価値。TOEICを一定点数取っていただければ、これは就職にも有利だし、できない学生はできない学生で達成が得られると。そういう形でその一定のレベルまで到達すると。達成感を得られると同時に一定のレベルまで到達するということですね。

それから授業負担の軽減、教員の地位向上。で、1コマを山形大学は1単位ですけど、山口大学は2単位として、もちろんそういう何かずるいことをしているわけじゃなくて、学生の自学自習を加味した、2単位に相当する授業の質には特化していると思うのですが、トータルなコマ数を減らすことができた。少人数クラスを作ったと。で、かつ、学生に達成感を与えたということですね。

ということで、英語教員の従来余り尊敬されてなかった、なんだ英語の先生かという感じだったけど、俺をここまでしてくれたということと思うのですけれど、そう

いう英語の先生の地位向上がはかれたというようなことだそうです。

それから、新しいプランをやるには負担の問題が大きいです。これはだから、山口大学も柔軟な体制でこういうTOEICのプランを導入するということが、大変な教員の負担があったと思うのですけれども、コマ数、単位を倍にすることによって、コマ数を調整したと。何とか教育効果も従来以上のものが得られるような体制にしたということですね。

それからこれは、大学のトップダウンの方針だそうですが、非常勤講師の大幅削減、そういう問題が3年前からあると。こういうプランは、そういうところからある意味できっかけとなって出てきたわけですが、それにも対応できるということでございます。

あとはディスカッションに移ったわけですが、人文の先生方からは色々テクニック、3ページに書いてありますけれども、質問がございました。それから工学部、工学部はジャビィの対応で、TOEIC、2年生以上の学生にTOEICを半ば強制的に課したそうですけど。そういったところを、工学部の先生からも関連する質問がございました。

それから、それで、英語教育の改革、安定的な体制の確立、それから時代に対応した質的な改善というのは待ったなしの問題で、中期目標にもその明示されているわけですが、そういうところでの議論の先がけとして、本ラウンドテーブルの議論、岩部先生の非常に有意義なお話が参考になれば幸いです。以上です。



司会 ありがとうございます。

私も実はこのテーブルにいたわけですが、若干丸田先生がいまいだったところを、多分こうではないかということで訂正しますが、400以上の場合は4単位を与えて、で、学部によって多分英語の単位が違うので、それにプラスするのは2の場合もあるし4の場合もあるということですね。それから350からに関しては、350以上に関しては2単位を与えると。だから残り単位数は4から6ということになる、ということですね。

ちなみに、ラウンドテーブルの1から3までは、だいたい今年始まった新しい実際上の試みで進行中のものなわけですが、このラウンドテーブル4は、実は新しい取り組みについてということで、これからやらなくては行けない取り組みということであります。多少性格が違うと思うのですが、質問、ご意見等お願いいたします。

山口 はい。何回もすいません。意見です。

このお話を参加させてもらって聞いた時に、私個人的に出たのはため息です。ハーという。大体この種のものというのは、何か問題を抱えているか、もちろん何かを良くしようという気持ちでお話をお聞きするものですが。

そして、そのハーというため息に気付いたか気付かれたか分かりませんが、最後に一言鬼武先生から、その、ここで外国語教育に携わっている先生方の積極的などうしたいという意見がないのは残念だと、キツイお言葉でしめられたわけなのですが、まことにそれには賛成なのですが、例えば我々、山大に関しては、語学教育に関しては、人文と教育という、そういった体制の中に分かれて、これはその中ですね、大河内先生がそういう説明を最初になされたのですけれども、やはり、今度のその中期目標計画の中でも、出来ていくというそういう教養教育検討委員会という中でですね、積極的にですね、その人選も含めて、そういう適任者を選んでもらって、やはり積極的にこの機会を利用して、せっかくあったものですから、話し合いを持っていただきたいということ、やはり人選には英語教員ばかりじゃないのです。どちらかという英語と関係ない先生の方が手厳しい、的を射た質問、または意見を持っている方が多いのですよ。

だからそういう形で、今回の機会を無にすることなく、せっかく英語教育改革というのであれば、積極的な進め方、改革に向けてそういう委員会の持ち方をさせていただきたいというのが意見です。

司会 ありがとうございます。次いきますか、それとも。

丸田 えーと、全く同感で、そこまで踏み込めなかったのが色々事情が、事情があるという語弊がありますが、こういうそのラウンドテーブルでそこまでちょっとやれなかったこととか。

それは、教育の山口先生がおっしゃったことと同じで、私も色々な大学を視察に行きましたし、それからほかの英語の先生も多分行っているところもあると思いますけれども、先駆的な改革を行っている大学というのは、どこも人を得ているのですね、トップがやはり、岩部先生は悪役がいたと。

それは本当の悪役じゃなくて、やはりある目的に向かってお前らやれと。そういうような人物がいて、そして岩部先生のような参謀的な有能な人がいて始めて達成できるということじゃないかと思います。

山口先生は、多分そういうことをおっしゃったのだと思いますけれども、それがやはり山形大学には必要じゃないかと私は思います。以上です。

えーと、本当はそのラウンドテーブルで聞くべき話で、ここの3ページの一番下にe-learningのことが書いてありましたので、1つだけお聞きします。

山口大学では、そのe-learning、この英語の

e-learning は、TOEIC用の e-learning をやられているのか、それともっと一般的な英語の e-learning なのかというようなことです。

司会 すいません。岩部先生。

岩部 はい。山口大学の e-learning の状況というのは、必ずしも進んでいないと言いますが、むしろ遅れている状況だと思うのですが、現在導入しているもの、それから試作途中のものというのがありますが、導入しているものはTOEICのものです。

で、それから授業と関連、連係して使おうとすると非常に使いにくくて、もうこれ止めようかなという状況ですね。

それから、授業と関連して、その、今実際に使っているものというのは、いわゆる e-learning というコンピュータを使ったものでは、当面間に合わないということで、教科書にCDを添付して、そのCDをそれぞれ自分の家で、CDプレイヤーで聞いてもらって、その宿題を出してもらおうという形の、形式の自学自習というのを今、実際には運用しています。

ところが、それが結構しんどい手間がかかる部分がありまして、英語教員、非常勤も含めてですけど、かなり肉体労働的なところがありまして、これ授業が8週間ですから、8週間だけですからゴールが見えているから何とか走れるので、これが一年間ずっとということになったら、みんな投げ出してしまうだろうというようなシステムなので、早急にその辺を e-learning 化したいという、自己開発で何とかやりたいと。

幸い、統一テキストという形で、材料は手持ちのものが結構あるわけで、それを特定の出版社が出しているものもありますけれども、そういうものを利用しながら、この e-learning というのをこれから作っていかうと考えております。

ただし、その e-learning のソフトを開発するというのは、非常に手間とエネルギーが必要な、お金も必要なのですが、そこら辺今まで山口大学で英語教育に対してお金が一銭も、特に付いたことがありませんので、そこら辺は遅れて当然で、そのあるネットアカデミーというのも、ある一人の先生が図書館長の時に、ポンと何かどこからお金を都合して買ってくださったのがですね、だいぶ前に1つあっただけということで、その後それっきりということだったのですが、これから e-learning に取り組まなくてはいけないということで、このある意味でその新しいステージに入ってますね、嬉しい面もあり、でも個々の英語教員のレベルでは、何か暗い気持ちになって、しんどいなという部分もあって。

私としては、今まで個々の英語教員の負担は増やさないという方針でずっときていました。で、新しいことをやる時というのは、ここでちょっと増やさないと、減らさないと新しいことができないと言いましたけれど、これは現実的にその通りなので、新しいカリキュラムを

導入した時に、古いカリキュラムの上級生というのと、1年生の新しいカリキュラムというのが同時に動くわけです。そうすると、絶対に負担は増えます。2倍とはいきませんが、1.5倍くらいはどうしても負担がかかりますから、思い切って、減らした状況からスタートしていかないと、なかなか上手く動かないという、どうしても無理が生じるという。

で、2、3年は持つのでしょうかけれども、そこら辺でエネルギーが切れて、改革疲れで倒れてしまうというのがオチだろうというふうに考えておりますので、ちょっとまたこれから未来に、未来にということで、何か予算も付いたという話もあって、それでこれをどうしようという、要するに今いるスタッフ、我々のところも同じで、あの教養部の移行教員に限らず、専門の方でも英語の教員というのがずいぶん定員削減とかですね、それから何か全学流用というので、センターを作るのにどんどん出されてしまっているという状況もありまして、あまり無理なことをやると挫折してしまうところがあると。

その辺、できるだけ負担を増やさないような形で開発して行きたいと考えております。

司会 ありがとうございます。

残りあと10分ほどなのですが、もう、テーブルの1から4まで、どこでも結構ですので、質問ご意見等ございましたらお願いいたします。

実は今週、蔵王の合宿というのがありまして、この教育方法等改善委員は、ほとんど疲れきっておりまして、本来ならサクラの質問などが出るはずなのですが、もう出るような状況にありませんから、すいません、よろしくお願いします。

伊藤 はい。教育の伊藤です。教養教育でドイツ語を担当しているのですが、丸田先生のご報告の最後のところ、人文学部の大河内先生の、クエスチョン、クエスチョン、クエスチョンと書いてあるその最後のところにGPA導入検討。英語はGPA外れたいというのは、これは山口大学からの回答だったのでしょうか。それとも大河内先生のご意見だったのでしょうか。あるいはこれは実際できるのでしょうか。

要するにTOEIC、要するに成績ABCD、その成績をどうつけるかということと関わっているという。GPAというのはそういうものだと思います。

それでTOEICの授業、特にあの第一クォーターで行われるTOEIC準備、これはなかなか成績がつけづらいと思います。そういうことで、GPAから英語はいずれ外れたいという希望があって、つまり合格が不合格ですね。その2つのそういう成績評価に変わって欲しいという、岩部先生のご希望と。でよろしいでしょうか？

岩部 習熟度別クラス編成をしましたので、非常に能力の高い学生が揃っているクラスと低いクラスがあって、

そこでそれぞれその、A B C Dとか優良可とかつけても、上のクラスの優と下のクラスの優って全然違う。一番上のクラスの可とですね、一番下のクラスの優を比べてとちが良いかというと、一番上のクラスの可の方がはるかにレベルが高い。

そうすると、それを元にG P Aというのを計算してもですね、あまり意味がないということで、その通常の、いわゆる教養科目というようなものでは良いのかもしれないですけど、少なくともそういう習熟度別にクラス編成したのものについては、そういう、各クラスごとの相対評価というものとは別にですね、その習熟度別クラスを横断するような統一的な尺度というものが無いと、評価できない。

したがって、英語に関しては山口大学はG P Aまだ導入していませんので、これから導入するという話ですけども、その英語に関しては、その、既に持っているG P Aの何か数値というのに影響を与えないような形で、だけでも単位は取ったということではカウントするということで、個人の持っている何かその、既に持っている平均値みたいなものを動かさないような形で計算してもらおうかなというように考えています。

で、英語そのものについてはどういうレベルの授業をとっているかということと、各学生がどういう教育のスパンを持っているかということで見えていただくべきだろうというふうに考えています。

だから、優良可というような評価は、ほとんど価値を持ってこないのではないかとこのように考えております。

司会 ありがとうございます。そのことに関連しても結構ですが、どなたか。まったく別の質問でも結構です。

小田 ほかのラウンド1から3、3つ目までというものは現実に取り組みられていると、先ほど元木さんから説明があったわけです。

それは実際にY Uサポートシステムのように動いているものがあれば、e-learningの研究中のものもある。

しかし、ある部分で見ると、動かして、問題をですね、我々のただの幻想と言いますかね、外から聞こえるものとしてやる、何というのですかね、そういうもので話し合う材料にはしていないつもりでございます。

そうした時に、英語だけはですね、先ほど山口先生からもお話がありましたけれども、これで今って、さて良くなるかと言ったら、僕には良くなるように思えないのですね。

じゃあどうするのか、さて。どこの委員会が大学にやっていますね、それがこの場で見えてくるのか。

ということが私にはですね、誰に言っているのか。おそらく、誰に言っているのかも分からないような形でラウンドテーブルがまとめられているのかどうなのか。

それともですね、最後にですね、これは教育担当の副学長である鬼武先生がですね、英語で誰も発言が出ない

と怒ったと言っている、最終的に責任は鬼武先生なわけですね。

そういうところで、私はどっかでちょっと見せて欲しい。常に合口を持ってですね、誰かに突きつけたりという形ですけども、そこをやっぱり何かですね、一歩でも進めたいと言いますか、半歩でも進めたいと言いますか、という願いはあります。

ちょっとお聞きしたいのですけれども、よろしくお願います。

鬼武 今言われた、確かに最終的には私が、そういう教育委員会を含めて、その立場にいますけれども、じゃあ英語教育は何が問題なのかという提案がない。

今、英語教育は問題だ、問題だと皆さんおっしゃるのだけれど、じゃあ今の現時点で、どこにどういう問題があって、具体的にじゃあ英語教育としてね、こういう問題があるという問題提起が見えていないのです。

で、ここに書いてある、今日僕初めてね、この、例えばワークショップの中で具体的に、例えばこういうふうに取り上げられているわけですね、例えば専任教員が削減されていると書いてある。で、具体的にじゃあ、どのような削減状態があって、で一体その英語教育としてどういうふうに取り組みたいというように考えておられるのか。

それで何か提案が出てくるのだろうかというふうに思っていたのですが、今日はそれがなかったのです。

したがって、今後そういうのが出てきた時の改善の責任は、私が負わざるを得ないわけで、それは小田さんが言う通りちゃんとやって行きたいと思っているし、それから中期計画の中、年度計画の中で、英語教育検討委員会というのを立ち上げると書いてありますから、これについては先ほど山口先生に言われたように、これはもう間違いなく立ち上げることになると思います。その委員会をまずは立ち上げることだろうと。それはやらざるを得ないですね。

だけど、まだ具体的には常勤、非常勤の問題はともかくとしても、改革をしなければいけないのだけれど、具体的にどこで問題となるかというのは、実は残念ながらここでは提案がなかった。今日はそこまで行かなかったと言った方がいいかもしれない。そう思います。

丸田 いいですか。

あえてそこまで踏み込まなかったというのは、私のその、こう、目的がということではなくて、あえて私は踏み込まなかったと。

それはどうしてかということ、英語の教員、英語の教員というとおかしいのですけれども、英語を担当されている専門学部、人文、教育、正確には数えていませんけど、20人弱くらいかと。その人たちがそれぞれ、私の見るところはそれぞれ自分独自に考え方を持っていて、その私、私は心の中に不安を一応持っている。

だけど、そういうものを受け入れられるような体制に

は、体制というか条件にはなっていない。期は熟していない。

そういうところでその勝手にですね、そういう議論を始めたら、逆にブレーキになると。小田先生がそうおっしゃるのはよく分かるけれども、これは時間をかける、ある程度時間をかける。

だけどスピード、かなりスピードアップしなきゃ駄目だろうと。それは見えている。それは今、副学長もおっしゃったように。英語検討委員会ができます。そこで全学レベルで解決すると。

で、このラウンドテーブルはそのきっかけになればいい。こういう問題があって、山口大ではこういう取り組みをしている。だけど山口大も、パーフェクトな改革ではないはず。やはりコマ数を削るためにある無理をしている。非常勤時間の削減に対する、やはり国立大としての苦しいですね、対応をしているわけですね。

で、我々、山形大学独自にですね、事情がありますので、そういうところはラウンドテーブルで思いつきとしてできないというのが私の考えであります。

司会 それでは最後、おひとかた、もしありましたら。

先ほど小田さんもありましたし、私も申しましたけれども、本当にラウンド1から3までと4というのは、徹底的に違ったテーマでありまして、本来ならばこのラウンド4というのは、もうちょっと独自に取り上げて、集中的にやっても良かったのかなという気もしないでもないのですけれども、それは中期計画、中期目標の中にあります英語教育検討委員会というのができるらしいのでありますから、そちらの方に、多分場を移して続けられるのであろうと。

で、おそらくは今日やった議論、あるいはこれ以降も今日の、例えば岩部先生の報告などを参考にして、さまざまな我々独自の考え方というものがこれからでてくるであろうということで、それを叩き台にして進めていただきたいというふうに思います。

さらに、1から3までの試みに関しては、半年やっただけですけれども、一つ一つ反省などを踏まえて、さらにもっと充実した取り組みになって行けばいいなというふうに思います。

というわけで、なんとなく予定調和的に終わってしまいます。

本日の教養教育ワークショップ。これにて閉会というふうにさせていただきます。どうもご協力ありがとうございました。

(80分)

(第6回教養教育ワークショップ参加者数)

部 局 等	人 数
学長	1
副学長	1
人文学部	20
教育学部	32
理学部	15
医学部	2
工学部	10
農学部	1
事務局	23
弘前大学	1
福島大学	1
秋田大学	1
東北芸術工科大学	6
山形短期大学	2
計	116